

# スペイン語の理由

上田博人

## 目次

スペイン語の理由 .....	0
目次 .....	0
1 文字と発音 .....	5
1.1 アルファベット .....	5
h は発音しない .....	5
ji の発音 .....	5
qu .....	5
月や曜日の頭文字が大文字でない .....	6
東京 Tokyo.....	7
逆さまの?や! (¿, ¡) .....	7
1.2 母音 .....	8
前母音と後母音の区別 .....	8
u の上にドットが 2 つ .....	8
pueden の発音 .....	8
1.3 子音 .....	9
語末の d.....	9
tl はなぜ二重子音にならない .....	9
s と r が続くと s の音が消える .....	10
s, ff, mm などの二重子音がない理由 .....	10
ll と y の発音 .....	11
v を b のように発音する理由 .....	11
1.4 音節とアクセント .....	11
母音が連続するときのアクセント記号 .....	12
¿dónde?のアクセント記号 .....	13
sí のアクセント記号 .....	13
estudiar と英語の study.....	13

2	名詞	14
	男性名詞と女性名詞	14
	vacaciones	14
	hacer maletas	15
3	動詞	16
3.1	SER と ESTAR	16
	英語の is とスペイン語の es	16
3.2	直説法現在	16
	er 動詞と ir 動詞の変化が似ている	16
	ar, er, ir 動詞の 3 つしかない	17
	cantáis にだけアクセント記号	17
	なぜ活用するのか	17
	huís にアクセント記号	18
	pensar と pedir	18
	主語の省略と動詞の変化	18
3.3	直説法線過去・点過去	19
	線過去の一人称単数と三人称単数	19
	「～しようとしたとき」という意味の線過去	19
	点過去の活用が多すぎる	20
	点過去不規則形	20
	線過去と点過去	23
	vi と vio にはアクセント記号がない	23
3.4	直説法未来、過去未来	23
	完了形の he, has, ha と未来形語尾の é, ás, á	23
	未来形の成立	24
	未来を示すのに未来形が使われない	24
	sabré, pondré, haré	24
	未来と過去未来の不規則形	25
	過去未来完了	25
3.5	接続法現在、過去	26
	接続法という用語	26
	接続法現在の活用形	26
	語根母音変化動詞の接続法現在形	26
	未来を示す時の副詞句で接続法が使われる理由	27
	接続法は過去が 1 つ	27
	接続法過去の ra 形と se 形	28

条件文 .....	28
3 . 6 命令形 .....	29
命令形の形 .....	29
2人称 .....	29
命令形の不規則形 .....	29
命令文の代名詞の位置 .....	30
否定命令文で命令形が使われない .....	30
3 . 7 不定詞、現在分詞、過去分詞 .....	31
英語の to の代わりになるもの .....	31
3 . 8 複合形 .....	31
完了形 .....	31
スペイン語と英語の現在完了形 .....	31
pretérito perfecto .....	32
未来完了の意味 .....	32
進行形 .....	33
直後形 .....	33
受動形 .....	33
ser 受動態の過去分詞 .....	33
その他 .....	33
4 形容詞 .....	34
5 副詞 .....	36
juntos .....	36
¡Estupendamente! .....	36
スペイン語の -mente は英語の -ly .....	36
形容詞が女性形になる理由 .....	36
6 機能語 .....	37
6 . 1 冠詞と代名詞 .....	37
el agua .....	37
de と del .....	37
un par de veces al año .....	38
冠詞 + 固有名詞 .....	38
無冠詞 en casa de .....	38
無冠詞 : salir de casa .....	38
無冠詞 + 名詞の複数 .....	39
tú と usted .....	39
ラテンアメリカ .....	39

usted は三人称 .....	39
le, les が se となる .....	40
conmigo, contigo .....	40
活用形 + 主語代名詞 .....	40
人称代名詞の位置 .....	40
代名詞の重複 .....	41
再帰代名詞の「義務」の意味 .....	42
6 . 2 疑問詞と関係詞 .....	42
スペイン語の ¿Por qué? と英語の For what? .....	42
疑問詞と関係詞 .....	42
cómo と que .....	42
6 . 3 所有語と指示語 .....	43
所有語の形 .....	43
mi = my, tu = your .....	43
所有語の変化 .....	43
指示詞の este, ese, aquel という男性単数形 .....	44
6 . 4 前置詞 .....	44
a と al .....	44
al と a la .....	45
a+「人」を示す直接目的語 .....	45
por と para .....	45
6 . 5 接続詞 .....	46
y .....	46
y と e .....	46
6 . 6 数詞 .....	46
dieciséis にアクセント記号 .....	46
11-15 までが特殊な形 .....	47
cinco, quince, cincuenta, quinientos .....	47
1 語の数詞と y を使った数詞 .....	47
dos miles とならない .....	48
primer, tercer .....	48
序数詞の語尾 .....	49
6 . 7 不定語と否定語 .....	49
¿Está alguien? .....	49
否定語の前置と no .....	50
肯定文 + tampoco .....	50

7	文と節 .....	51
	HACE 「...前に」 .....	51
	「存在」の hay .....	51
	複数主語 son + 単数名詞 .....	51
	自動詞が少ない 再帰動詞 .....	52
	再帰代名詞と所有形容詞 .....	53
	3人称の再帰代名詞 .....	53
	主語の後置 .....	54
8	語と語形成 .....	55
	英語と形が似ている .....	55
	スペイン語の cantidad と英語の quantity .....	55
	曜日 .....	55
	「浅い」という意味の単語 .....	56
	スペイン語の estudiar と英語の study .....	57
	スペイン語と英語 .....	58
	クリスマス .....	58
	racista .....	58
	否定の接頭辞 .....	59
	No hay de qué .....	59

# 1 文字と発音

## 1.1 アルファベット

### h は発音しない

**h は発音しないのに、なぜつづりには入っているのですか？**

「h」は、ラテン語で「h」と書かれていた単語や、「f」で書かれていた単語がスペイン語でその語源を尊重して「h」で書かれるようになりました。スペイン語の綴りは一般に発音の変化を尊重しているのですが、一部ではこのように語源の方が尊重されます。発音が同じなのに「b」で書いたり、「v」で書いたりするのも同じ理由です。なお、 $f > h > [\text{無音}]$ という変化はスペイン語に固有の変化です。

### ji の発音

**人の名前を書くとき、「ジ」を ji としてもいいのですか？ ji だと「ヒ」と読まれてしまうのでは...？それから、なぜ ji を「ヒ」と発音するのでしょうか。とても変な感じがします。**

ふだん書き慣れているローマ字表記にしてかまいません。「富士山」Monte Fuji も「フヒ」と読まれることが多いのです。もし気になるようでしたら、名前の ji を「じ」と読んでください、と言うと気をつけてもらえるはずですが。スペイン語の ji, je そして gi, ge はそれぞれ「ヒ」、「ヘ」と発音します。中世では、英語と同じように「ジ」、「ジェ」のように発音していたのですが、近世そして現代になり、それが初めに無声化して「シ」、「シェ」となり、次に軟口蓋(口の天井の後ろの部分)に移動して、「ヒ」、「ヘ」となりました。

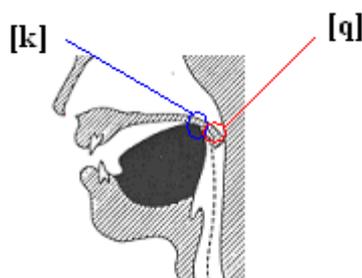
### qu

**英語でもスペイン語でも q の後は u しか来ませんが、他のものがくるような言語ってあるのですか？むしろなぜ u だけなんですか？**

q はセム語で qoph と呼ばれ、これはヘブライ語の qoph 「猿」に相当するという説があります。(そういえば Q の右下に伸びる線はサルの尾に似ています。) このようにヘブライ語でも、そしてアラビア語でもローマ字で書かれるときは q の後に u 以外の母音 comes。たとえば「コーラン」は

アラビア語で quran と書きます（正確には a は長い母音です）。

次にスペイン語や英語ではなぜ次の母音が u だけなのかについて説明します。q はセム語では[k]よりさらに奥の方で発音される音でした。次の図は[k]の位置ですが、それよりも後ろの赤線で示した部分が[q]の発音の部分です。これを現代の音声学でも[q]という音声記号で示します<sup>1</sup>。



ラテン語では[q]はありませんでしたが、それに近い[kw]という子音と w の連続を示すために Q の文字が使われるようになりました。そして w が「ウ」という音に聞こえるので、常に QU という連続で使われていました。たとえば QUINTUS は「クイントゥス」という発音です。それがスペイン語では quinto 「キント」となりました。英語の[kw]の音はノルマン人の征服以前は cw で書いていましたが、征服後はフランス語やラテン語の書き方に従って qu で書くようになりました。スペイン語では kw k という音の変化がありましたが、英語ではそれがありませんでした。たしかに qu- は現在でも、たとえば queen [kwi:n]のように、[kw]で発音されています。

## 月や曜日の頭文字が大文字でない

英語と違い、月や曜日の頭文字が大文字でないのには何か理由があるのでしょうか？

頭文字の大文字・小文字の区別は学校教育などで教えられる規範に従っています。この規範を定めるのは、「スペイン王立アカデミー」Real Academia Española という機関です。そこで発行された「スペイン語の正字法」Ortografía de la lengua española という本によれば、曜日、月、季節の頭文字は小文字にする、と規定されています。このアカデミーはかなり求心力があり、全世界のスペイン語の規範を定めているようです<sup>2</sup>。

<sup>1</sup> IPA (International Phonetic Alphabet) です。

<sup>2</sup> 先ほど書いた Ortografía de la lengua española という書名ですが、スペイン語では、このように、書名の最初の語は大文字にして 2 番目の語から小

このように、大文字・小文字の問題は言語ごと、時代ごとの規範や習慣に従っているのです、それぞれ異なることがあります。ドイツ語ではすべての名詞を大文字で書くし、また、逆に、同じスペイン語でも古い文献(中世)を見ると、固有名詞でさえ小文字で書かれていることがあったりして、やっかいです。

それでは、なぜアカデミーは上のように決めたのでしょうか。これは、私の推測ですが、アカデミーは絶対的な権力で一方的に規範を押しつけるのではなく、教養のある人の書き方を尊重する、という姿勢をとっているのです、規範を定めたときには、そのように書く人が多かったからではないかと思います。たしかに19世紀には大文字と小文字の書き方がありましたが、大規模な資料を使って、代表として *lunes* と *Lunes* だけ調べてみると、圧倒的多数が小文字で書かれているのがわかりました。それが20世紀になると、ほとんどすべて小文字になっています。

それでは、なぜ教養のある人は小文字で書くことを好んだのでしょうか。これも推測ですが、スペイン語では大文字は基本的に人名・地名などの固有名詞に限られているので、曜日や月の名は人名・地名などの固有名詞とは区別されたのだと思います<sup>3</sup>。そこで、先述の「スペイン語の正字法」でも、曜日名と月名が季節名<sup>4</sup>と並べて同様に扱われている理由がわかります<sup>5</sup>。

## 東京 Tokyo

どうして「東京」は *Tokyo* ではなくて、*Tokio* と書くのですか？他にもこのような例はありますか？

スペイン語に子音 + *y* の連続がないので、*Tokyo* の *yo* の部分は二重母音になり、*Tokio* と書かれます。京都も *Kioto* と書かれます。最近スペインで発行された地図帳などを見ると、*Tokyo*, *Kyoto* という表記も使われています。

## 逆さまの?や! (¿, ¡)

逆さまの?や! (¿, ¡) が使われるようになったのは？

---

文字にする、などということも決まっています。

<sup>3</sup> 曜日と月は固有名詞だ、という見解もありますが、ここでは、人名・地名などの一般の固有名詞と区別して考えておきましょう。

<sup>4</sup> これは固有名詞ではありません。

<sup>5</sup> 英語でも、さすがに、季節名は文頭でなければ小文字ですね。

逆さまの *¿, ¡* はスペイン王立アカデミー Real Academia が 1754 年に発行した正字法 (Ortografía) によって規定され、その後一般に浸透していきました。しかし、19 世紀になっても使用しない例も多く見られました。この逆さまの *¿, ¡* がないと、たとえば文の途中から疑問文や感嘆文が始まる場合や、主語が示されなかったり、倒置しないときには文の最初から疑問文であることがわかりづらいので、現在では完全に統一されて使われています。

## 1.2 母音

### 前母音と後母音の区別

「高母音」と「低母音」の区別は二重母音と分立母音の識別に役立ちますが、「前母音」と「後母音」の区別は何のためにあるのですか。

「前母音」は *i* と *e* です。これらの前にある *c* と *g* は、後母音の前にあるとき<sup>6</sup>と発音が違います。たとえば、centro [セントロ] と contra [コントラ], gente [ヘンテ] と gamba [ガンバ] を比べてみましょう<sup>7</sup>。このために、前母音と後母音を区別します。

### u の上にドットが 2 つ

スペイン語の辞書を引いていたところ、不思議な文字と出会いました。arguir という単語で、ここでは表せませんが *u* の上にドットが 2 つついています。ドイツ語とかに出てきそうな文字ですが、スペイン語では見たことがないので、これは一体何なのか、今も使われているのかといったことを教えて下さい。あまり見ないのはなぜでしょうか。

*u* の上にドットが 2 つついているのは、スペイン語で「ディエレシス diéresis」といい、güi, güe のように書き [gwi, gwe] と発音されます。一方 gui, gue は [gi, ge] と発音されます。確かに頻度は少ないのですが、arguir だけでなく、lingüística, bilingüe などでも使われます。あまり見かけないのは、*u* の上にだけ、しかも güi, güe というスペルにしか使われないからです。

### pueden の発音

pueden の発音が「プエデン」でなく、「ペデン」のように聞こえる理由は？

「プエデン」ですが、[u] の発音で唇が丸まるので、それが両唇音の [p] と共通して、

<sup>6</sup> それから音節の末尾にあるとき。例：lección, digno.

<sup>7</sup> 「子音」の項の「*c* と *g* の発音」を見てください。

飲み込まれたような感じになり、「ペデン」のように聞こえることがあります。ていねいな発音ではちゃんと「プエデン」となります。

## 1.3 子音

### 語末の d

Madrid の最後の d が聞こえにくいのですが、発音しなくてもよいのですか。なぜ最後の d は聞こえにくいのですか。

まったく発音しない人もいますが、丁寧な発音では軽く破裂させるか、破裂しない d で終わらせています。マドリードなどでは語末の d を z で置き換える発音することもあります。

スペイン語の単語の終わり（語末）の子音は一般に弱化する傾向があります。これは、ラテン語からスペイン語に変化する段階から現代に至るまでずっと続いている傾向です。スペイン語だけでなく、たとえばお隣のフランス語でもさらに弱化して失ってしまった子音がたくさんあります<sup>8</sup>。比較的がんばって残っている子音は d, s, z, n, l, r ですが、これらの共通点は「歯」の位置で発音されることです。

### tl はなぜ二重子音にならない

pl と cl は二重子音なのに、tl はなぜ二重子音にならないのですか。

tl はそもそもあまり多くありませんが、たとえば atlas や Alántico などに見られます。そのときは at-las, At-lán-ti-co のように切れ、二重子音になりません。t と l の発音する位置が同じなので、それが連続して同じ音節になるときは「側面開放音」（t が音節の始めにある）になります。そのような音を持つ言語がありますが、スペイン語とは音の印象がずいぶん違います。スペイン語では、t が音節の終わりにあって弱くなり、聞こえにくくなります<sup>9</sup>。

<sup>8</sup> たとえば、語末の s は発音されなくなりました。vous では「ヴ」だけなのに、vous avez だと「ヴザベ」といって、s が復活します。でも、avez の z は発音されません。語末の s の弱化はスペイン語でもスペイン南部やラテンアメリカの各地に起きています。

<sup>9</sup> 同じスペイン語でもメキシコでは tl- が二重子音になり、t はそれほど弱くなりません。

## s と r が続くと s の音が消える

los racistas. s と r が続くと s の音が消えて聞こえませんか。これはなぜですか？

これは音声学の用語で「同化」(assimilation)という現象によるものです。音声は連続して発音されると、単独で発音される時とは異なることが起きます。この場合、sはその次に来るr(震え音)によって有声化し[z]となりさらに弱まり、そして消失してしまうのです。sの発音のときはまだrがないのに、その影響を受けるというのは変に思われるかも知れませんが、発音をスムーズにするためにsの発音の時点ですでにrの準備に入っていると考えられます。このように後の音が前の音に影響を与える現象を「逆行同化」(regressive assimilation: asimilación regresiva)と呼びます。

## s, ff, mm などの二重子音がない理由

英語で professor, officina...などの ss, ff が、スペイン語では単純に profesor, oficina となるのは何か理由があるのですか？

この問題は広くロマンス諸語の変化の脈絡の中で考えるとよいと思います。西ロマンス語の一員としてのスペイン語は東のイタリアなどとは異なり、一般に子音が単純化する傾向がありました。それは、子音の有声化、そして、無音化と一緒に考えなければなりません。歯音を例にすると、tt>t>d>ゼロという流れがあったのです。興味深いことに、t>d になると、tの位置が空いているので、tt>t になる、また dの位置が元々の dと競合するので、元々の dは追いやられ無音になりました。

このような、変化が何か人工的な目的にあっていて不思議ですが(構造主義言語学ではそのようなとらえ方をします)、私は「弱音化・単純化」という一般的な変化として捉えたほうがよいと思います。それがあったために、さまざまな形で音の変化が生まれたのでしょう。一見、現象的に違うもののように見えるものも、実は共通の原理が働いている、ということはいくつもあることです。

他の言語との接触も理由として挙げることはできますが、そうすると、その接触がなかったところでも同様な現象があった場合、不都合となります。そこで、個別的な理由よりも体系的・普遍的な理由を優先させることにします。

語学的な理由を考えることは、学習者の興味を引き起こし、学習意欲を高める、というご意見に賛成です。レポートなどに質問があるときは、なるべくわかりやすく答えるようにしておりますが、私自身も知らないこと

が多く、まだまだ勉強の途中です。上の説明でわかりにくい部分がありましたら、お知らせください。よろしく願いいたします。

## ll と y の発音

yo llego の発音は「ジョ・ジェゴ」と聞こえたり、「ヨ・イエゴ」と聞こえたりします。ぜんぜん違う発音なのに、どうしてこのように変化するのですか。

ll と y の発音は「ユ」(英語の you) ~ 「ジュ」(英語の pleasure)のどちらでも発音されます。地方差や個人差があるようです。とくに文頭だと「ジュ」になる傾向があります。

y の音は、古くは(ラテン語の時代から)「ユ」のような音でした。それが、強く発音されると舌先がさらに上に持ち上がって「ジュ」のようになりました<sup>10</sup>。一方、ll は古くは(中世スペイン語の時代)「リュ」という音でしたが<sup>11</sup>、舌先が口の天井(硬口蓋)から離れて「ジュ」という音になったのです。これがさらに弱く発音されると「ユ」になります。

## v を b のように発音する理由

たしかに、現代スペイン語には f があるのに[v]がなく、v の文字も[b]で発音されます。この理由として、子音体系全部を眺める必要があるでしょう。有声と無声の対立は一般に閉鎖音と摩擦音でペアをつくります。p-b, t-d, k-g; f-v, s-z, 英語の th (think, that) などです。スペイン語の場合、閉鎖音のペアはずっと保たれたのですが、摩擦音のほうは、ぜんぶ無声になり、現在は f, s, x だけになりました。そうすると、f-v だけの対立を残すのは、構造的な負荷になるので解消されたと考えられます。一方、中世スペイン語では、s-z や英語の「シュ」short と「ジュ」pleasure の子音のような対立があったので、[v]という音も健在でした。このように、音声の特徴は、個別に捉えるのではなく、体系的に考えると納得がいくと思います。

## 1.4 音節とアクセント

<sup>10</sup> 「イー」と言いながら、舌先を持ち上げてみると「ジー」となります。

<sup>11</sup> 一部の地域(スペイン北部や南米のアンデス地域)では現在でも ll が「リュ」のように発音されています。

\* desarrollo のような場合、音節の分け方が辞書によって異なっているのに気がつきました<sup>12</sup>。des-と de-はどちらが正しいのでしょうか。なぜ、2種類の分け方があるのですか。

des-とするのは語源にしたがうものです。Manuel Alvar Ezquerra: Manual de ortografía de la lengua española (ed. Vox, 1995)によれば、nosotros は nos-でも no-でもよいそうです。この点について Real Academia Española: Ortografía de la lengua española (ed. Espasa, 1999) では触れていないので、いつも迷うところです。私は、初心者には語源はわからないので音声主義にして de-sa-rro-lló にしてよいと思っています。ただ、たとえば ad-he-rir というのは、音声の基準によれば、a-dhe となってしまうかもしれませんが、これは Manuel Alvar Ezquerra は ad-he だけを認めています。たしかにやっかいな問題です。

## 母音が連続するときのアクセント記号

テキストの p.11 のように音節を切り、アクセント記号を付ける、という原則に従うと、「ba-úl」や P.16 の「cant-á-is」、P.17 の「es-tá-is」は元々アクセント記号を付けなくても後ろから二番目の音節にアクセントが来る気がするのですが、どうしてアクセント記号を付けるのですか？

baúl や estáis にアクセント記号をつけないと、baul の a や estais の e の上にアクセントが来てしまいます。そうすると、これらの語のアクセントとしては正しくないので、アクセント記号が必要になります。

(二重母音とアクセントの関係はとても複雑です。baúl という語の強勢は u の母音にあります。もし、アクセント記号をつけないと二重母音となって a に強勢がくることになってしまいます。それを避けるために、アクセント記号をつけて母音が分立していることを示さなければなりません)

このことが起きるのは二重母音のときです。二重母音は続けて発音するのが原則です。その原則通りにならないときは、このようにアクセント記号が必要になります。

音節を切り、アクセント記号を付ける、という原則を適用すると、baul、es-tais となります。そしてアクセントが p. 11 の「8. アクセントの位置」の原則通りにならないときに、アクセント記号が必要になるのです。

このように、二重母音とアクセント記号の関係は少し複雑です。

<sup>12</sup> たとえば、小学館『西和中辞典』と研究社『プエルタ新スペイン語辞典』

## ¿dónde?のアクセント記号

なぜ¿dónde?にアクセント記号がついているのですか？

たしかに、母音で終わっていて、後ろから2番目の音節に強勢があるので、規則通りならば必要がないはずですが、疑問詞にはアクセント記号をつけるというルールがあります。¿Cómo está usted?の¿cómo?も同様です。

## síのアクセント記号

なぜ sí にアクセント記号がついているのですか？

原則では単音節語にはアクセント記号をつけません。しかし、他に同じ形の単語があるときは、このようにアクセント記号をつけます。sí は「もし...ならば」(英語 if)という意味でアクセント記号をつけない si と区別します。

## estudiar と英語の study

スペイン語では estudiar や esquí など、英語で s ~ から始まる単語が e がつく語がいくつもありますが、これはなぜですか？

スペイン語では s + 子音で始まる単語がないので、外来語などはその前に e がつきます。esquí「スキー」、esmog「スモッグ」、espía「スパイ」など。また、estudiar のようにラテン語から継承した語でもやはり語頭の e があります。これは、s が次の子音と比べて強く聞こえ、それだけで音節を形成したためであると考えられます。s だけでは音節にならないので、一番ニュートラルな母音の e を付け加えたのです。日本語の外来語で英語の子音だけの部分(たとえば home, stay, book, )に u や o が入ることと似ています。

## 2 名詞

### 男性名詞と女性名詞

男性名詞と女性名詞はどうして生まれたのですか？ 区別のない言語も沢山あると思うのですが...日本語と英語しか学んでこなかった私には名詞を男性と女性に分けるという感覚があまりわかりません。スペイン語を話す人々が物に性を与えて、世界を見ていると思うと、私たちとは違った世界観を持っていると思うのですがどうでしょうか？

たしかに生物ならば、性の区別をすることは納得できますが、無生物にもなぜ男性名詞と女性名詞があるのか不思議な感じがします。スペイン語の話者に聞いたことがあります。たとえば libro のような男性名詞に男性らしさは感じられないし、mesa に女性らしさというものも感じられないそうです。とくに男女の差を意識しながら冠詞や形容詞の性を名詞の性と一致させているようではないようです。ちょうど主語に合わせて動詞の形が変わるのと同じように、文法的な(自動的な)規則だと考えられます。

言語の歴史をたどると、多くのヨーロッパ(と南アジア)の言語の祖先であると仮定される「インドヨーロッパ語」で、生物についてだけ男性と女性の区別がありました。意味的に男性と女性、雄と雌の区別が必要だからです。そして、形容詞はその性の区別と一致して、文法的な関係を示していたのです。それが、後に生物以外を示す名詞にも広がりました。生物以外では「男性」と「女性」という意味の差はなく、冠詞・形容詞と名詞の間の文法関係を示すだけになりました。生物には冠詞・形容詞と名詞の間の文法関係を示す性があり、無生物にはそれがない、というのでは統一がなくややこしくなるので、言葉の歴史の上で自然に統一されたのだと思われまます。なお英語にも古くは名詞の性がありましたし、その親戚の現代ドイツ語でも性があります。

### vacaciones

**vacaciones が複数形になるのはなぜですか？**

夏休みは1回なので単数でよさそうですが、多くの場合複数形で使います。以前は単数で使われていて、また vacanza などという言葉(「バカンス」これも単数)もありました。最初の複数形(vacaciones)が出現したのは比較的最近(1930年代)で、「年間の(複数の)有給休暇」という意味で使われるようになったようです。夏の休暇ならば1回のはずですが、この複数形の表現が慣用になって広がったようです。

## hacer maletas

¡Tu eficacia haciendo maletas!の文で、ここまではずっと単数形でしたが、ここでどうして maletas と複数形になっているのですか？

ここでは今目の前にあるスーツケースを話題にしているのではなくて、一般に「旅行の支度をすること」について言っています。または繰り返される動作についても言っているので複数形が使われています。このように現実に単数のものであっても一般的な動作を指すときに複数形が使われることがあります。たとえば1冊の雑誌を読んでいる相手に、¿Lees estas revistas?と聞く場合です。これも「君はこんな雑誌を読んでいるの?」という感じです。

## 3 動詞

### 3 . 1 SER と ESTAR

#### 英語の is とスペイン語の es

英語では、現在形で三人称単数と名詞や形容詞とを繋げるために、be 動詞の[is]を使っていますが、これはスペイン語の「es」に縁があるのでしょうか？音として非常に似ていますので、すこし疑問を感じていますが、例えば：He is handsome, Él es guapo など

→スペイン語の es はラテン語の est に遡ります。これは更にインドヨーロッパ語の推定形 \*es-に遡ります。英語の is も、やはり、このインドヨーロッパ語の推定形 \*es-に遡るので、共通の語源を持つことになります。

\* (8) ser と estar の違いがいまいちわかりません。1課本文(8)の es famosa...は「有名だ」という状態を表している気がするのですが、これは性質のほうになる、というのがよくわかりません。

この文の主語は前の文にある Madrid で、意味は「それ(マドリード)はいくつかの美術館で有名です」となります。確かに「有名だ」というのは「(有名という)状態」を示しているようですが、一方 Madrid が持っている「性質」を表しているようにも思えます。両者の違いはこの場合微妙ですが、estar はそのような状態を保ちながら存続していることを示し、ser はその性質を持っていることを示します。ここでマドリードが有名だというのは、前者(「有名という状態である」)ではなく、後者(「有名だ(という性質を持っている)」)にあたります。なぜ、このような違いが生まれたのか、ということになると、ser はラテン語の ESSE の意味を引き継ぎ、その(基本的な)性質を示していたからです。エッセンス(essence)という言葉の語源にあたります。一方、estar の語源の STARE は、「そのような状態で立っている」という意味でした。英語の stand と比べてください。

### 3 . 2 直説法現在

#### er 動詞と ir 動詞の変化が似ている

er 動詞と ir 動詞の変化が似ているのはなぜですか？

ラテン語には a:re, e:re, ere, i:re という4種類の動詞がありました。後3者(e:re,

ere, i:re) がスペイン語の er, ir 動詞に変化しましたが、アクセントのない i の部分は e に変わったのです。たとえば L. vi:vere の L. vivis > Sp. vives のように i > e のように変化しました。その結果 er 動詞と ir 動詞はとてもよく似た変化形になります。一方 ar 動詞の a は安定した母音なので、このような変化はしませんでした。

## ar, er, ir 動詞の 3 つしかない

**なぜスペイン語では動詞は ar, er, ir 動詞の 3 つしかないのでしょうか？ラテン語やギリシャ語でもそうなのですか？**

スペイン語の直接の祖先はラテン語ですが、ラテン語では a:re, e:re, ere, i:re (:は長い母音を示します)がありました。それがスペイン語では長い母音は全部短くなったので、ar, er, ir の3種にまとまったのです。スペイン語の歴史を勉強すると、動詞の変化などが次第に単純に整理されてきたことがわかります。現在のスペイン語の体系はとても整然としてしています。

## cantáis にだけアクセント記号

**なぜ cantáis にだけアクセント記号があるのですか？**

ai の部分が二重母音なので、tais が1つの音節になります。最後の音節が n, s で終わっていて、そこに強勢があるのでアクセント記号が必要になります。

## なぜ活用するのか

**英語は 3 人称単数現在の時のみ動詞が活用する。なぜ 3 単現の時のみなんだろう？また、スペイン語の動詞が人称により活用する理由が、主語を省略するためだけだとしたら、主語を省略しないほうが結局わかりやすいし、無駄に動詞を覚える必要がなくなるのでは？ヨーロッパの言語に多く見られる動詞の活用には何のメリットがあるのだろうか？**

英語にもかつては人称による変化が揃っていました。3 単現の s はそのなごりです。英語の兄弟であるドイツ語では今でもしっかりと活用変化があります。スペイン語の動詞が人称により活用するのは主語を省略するため、というより、もともと動詞には人称変化があって、それによって主語がわかっていたのです。それが英語のように人称変化があいまいになり、主語を明示する必要になったと考えた方がよいと思います。フランス語でも同様に、語尾だけではわかりにくくなって、それで主語が義務化されています。

## huís にアクセント記号

### huís にアクセント記号がつくのはなぜですか？

huís は本来ならば 1 音節語であり、しかも ui は閉母音の連続ですからアクセントは後の母音 [i] にあるはずです。そこで、規則からはアクセント記号は不要なはずです。実際にスペインの言語アカデミー(1999)はアクセントのない形を認めています。一方、hu-ís というように、母音を分けて発音することもあるので、その場合はアクセントをつけてもよい、とも言っています。どちらのほうが多いのかはあまり書かれた資料の頻度がなくて正確には言えないのですが、16 世紀以降の近代スペイン語の資料を調べてみるとアクセント記号をつける方が断然多いようです。日本のスペイン語教育の辞書や参考書では従来から huís の形を載せています。私はアクセントを外してもよいのではないかと思います。

## pensar と pedir

語根母音変化動詞の pensar と pedir で、同じ e の部分でも pensar では e ie に変化して、pedir では e i に変化するのはなぜですか。

これは、e という母音によるのではなく、それぞれの動詞がどのような活用のタイプに属するのかによります。同じ e があっても、たとえば presentar の e は変化しません(規則動詞です)。同じ「e」なのにこのような区別ができた理由はラテン語で母音が長短 2 種あったためです。長母音はそのままスペイン語に継承されましたが、短母音は e>ie という変化を受けました。これが pensar の活用形の理由です(e>ie, o>ue の変化は AR 動詞と ER 動詞に限ります)。一方、pedir は語尾の ir の部分の i が条件となり、異なる音変化を生みました(e>i の変化は IR 動詞に限ります)。

## 主語の省略と動詞の変化

どうしてスペイン語では主語を省略するようになり、動詞を変化させるようになったのですか。

言語の歴史を振り返ると実はスペイン語のように主語がないタイプや、形容詞や動詞が変化するタイプの方がヨーロッパの言語の根源に近いことがわかります。一方、たとえば英語では主語を動詞に並記させるようになり、また形容詞・動詞の変化がなくなったりしました。このように言語は一定のタイプに固定されるものではなく、変遷や変異をも含めて相対的に見るほうがよいと思います。スペイン語を学習することで私たちはいろいろ

るな視点や考え方も学ぶことができます。

### 3.3 直説法線過去・点過去

#### 線過去の一人称単数と三人称単数

線過去の活用形は一人称単数と三人称単数はまったく同じ活用ですが、なぜ同じになったのですか？明らかに不便に思えるのですが。

たしかに紛らわしくて不便ですね。これは、スペイン語の母体であるラテン語ではちゃんと区別されていました。ar 動詞の活用語尾は（ラテン語では are 動詞）、abam, abas, abat, abamus, abatis, abant のように活用していたので、主語がなくても大丈夫でした。ところが、スペイン語になると語末の m と t が消失して、aba, abas, aba, ábamos, abais, aban となったので、その結果、1 人称単数と 3 人称単数は同じ形になってしまいました。（ここで、s は残っているのになぜ語末の m と t がなくなったのかは、子音の音声的特徴によります。スペイン語では n, s, l, r, d, z が語末で比較的安定しています。これらの子音で終わる単語や変化形はすぐ見つかりますね。）

このように、言語の歴史を辿ると、コミュニケーションに不便になるにもかかわらず、音声的な条件で一律に変化してしまう事例がいくつもあります。これから勉強する過去未来や接続法現在、接続法過去でも同じです。

現在のスペイン語圏の人は不便を感じていないのでしょうか。主語がなくてもほとんどの場合、文脈、状況、常識などで判断できるので問題ないのですが、ときどき誤解が生まれることもあります。そのようなときは、ちゃんと主語をつけておいたほうがよいでしょう。

#### 「～しようとしたとき」という意味の線過去

Quando salía de casa, me llamó un amigo mío.「私が家を出ようとしたとき、友人から電話があった」線過去が「～しようとしたとき」の意味になるのはなぜですか。線過去のイメージからかなり離れている気がします。

「出かける」というように動作が必然的に完了する意味の動詞の場合は、線過去が「...している」（出かけている）という意味でなく、「...しようとする」（出かけようとする）の意味で使われることがあります。これは、「1 回で完了してしまう動作」を線過去で「未完了」の状態を示すとき、これから動作が始まること以外のことを示せないからです。動作をしてしまえば必然的に完了してしまうでしょう。salir de casa「外出する」と estudiar en casa「家で勉強する」を比べてみるとわかりやすいと思います。Estudiaba

en casa.は「家で勉強していた」という意味になりますが、Salía de casa.は「家を出ていた」という意味にはとれません。

それから忘れてならないのは、Salía de casaは、「これからする動作」だけでなく、「過去の習慣」も示すことができます。たとえば、Yo salía de casa muy temprano todos los días.「私は毎日とても早く家を出たものだった」。

## 点過去の活用が多すぎる

点過去の活用が多すぎる。なぜ点過去は線過去や現在形に比べて複雑な活用の仕方をするのだろう。英語では go, have などよく使う動詞が不規則な活用をしたりするけれど。

確かに、英語に比べてスペイン語は活用形が多いようですが、それでもとても整理された規則的な変化をします。不規則変化の中にも、一定の規則がありますから、そこを見失わないようにしましょう。点過去はとくに不規則ですが、これは時制体系の中で点過去だけが他の時制から独立した位置にあるためです。「過去に済んでしまったこと」を特別にとらえているのです。

## 点過去不規則形

点過去不規則形はなぜ起こってしまったのだろうか？

強変化はラテン語の時代からすでに不規則でした。母音変化動詞はラテン語からスペイン語に変わるときに音韻変化があったために、不規則になりました。

強変化形についての質問が多いので、ここで整理して説明します。そもそも「強変化」と呼ばれるのは動詞の語根に強勢があるためです。たとえば、supe, supiste, supo, ...の中で、supe と supo は su に強勢があるので強変化形と呼ばれます。一方、supiste, supimos, supisteis, supieron は su に強勢がなく、変化語尾に強勢があるので「弱変化形」と呼びます。点過去の規則動詞と語根母音変化はすべて「弱変化形」です。この強変化形の特徴は不定詞の語根とかなり違っていることです。

さて、この強変化形はどのようにして生まれたのでしょうか。この強変化はラテン語ですでに存在していたので、ラテン語歴史文法の研究成果を参照しなければなりません。それによるとラテン語(L)での過去形には次の4種類の形成法がありました。

- (1) 子音の重複
- (2) 語根の母音の変化

## (3) S の付加

## (4) W の付加

(1)と(2)は一部の動詞に限られますが、(3)は語幹が子音で終わる動詞に共通し、(4)は語幹が母音で終わる動詞に共通します。(1)~(4)に従ってスペイン語(Sp)の強変化動詞を分類すると次のようになります。

分類	L.不定詞	L.過去	Sp.不定詞	Sp.点過去
(1)	stare	steti	estar	estuve
	dare	dedi	dar	di
(2)	facere	fecit	hacer	hice
	venire	veni	venir	vine
(3)	dicere	dixi	decir	dije
	trahere	traxi	traer	traje
	ducere	duxi	conducir	conduje
	quaerere	quasi	querer	quise
(4)	habere	habui	haber	hube
	posse	potui	poder	pude
	sapere	sapui	saber	supe
	tenere	tenui	tener	tuve
	ponere	posui	poner	puse
その他	esse	fui	ser	fui
	ire	ii	ir	fui

(1)子音の重複と(2)母音の変化はインドヨーロッパ語(IE)に共通して古くからあった変化形です。(1) 子音の重複によって L.stare (>Sp. estar)と L.dare(>Sp. dar)の過去形として steti, dedi という形が生まれました。steti は現代スペイン語(Sp)では haber - hube と形を合わせて estuve となりました。同じことが andar - anduve でも起こりました。dar も同じように子音が重複して L. dedi という形が生まれましたが、母音の間の d が失われて、Sp.では di となりました。これが、estar, andar, dar が ar 動詞なのに(後に述べますが ar 動詞と ir 動詞は弱変化、つまり規則変化になるのが普通です)、強変化である理由です。つまり子音の重複によるためです。

(2) ラテン語で過去形を作るのに語根の母音を変化させるタイプがありました。この母音の変化が hacer - hice, venir - vine という強変化を生みました。venir - veni の語根の母音はどちらも同じように見えますが、実は venire では e が短く、veni ではそれが長かったので二つは区別されていま

した。

(3) 語根に S をつけて過去を作る方法はギリシャ語など IE 語族の一部に限られるので、比較的新しい方法ではないかと想定されます。前に h や k があるときは [ks] 「クス」となり、文字は x で書かれます。これがスペイン語の時代になると音変化をして [x] 「フ」となりました。querer の場合は s がそのまま残っています。

(4) 最後の W は他の IE 語族の言語に無く、ラテン語に限られるため最新の方法だと思われます。habui, potui, sapui, ... などの -u- がその印です。この u は前にある語根の母音を閉じさせる力があつたので、点過去の語根はどれも hube, pude, supe... のように u という母音が現れています。なお、ponere - posui は S が付加されたように思われますが、L. ponere は pos(i)nere に由来するので、むしろ語尾の ui に注目すべきでしょう。

ところで ser は L. esse に由来しますが、その過去は L. fui であつて不定詞とまったく形が異なっていました。これが Sp でも継承されていますが、一方 ir もその形を拝借することになりました。ドイツのスペイン語学者 Hanssen は、古いスペイン語で ser が「存在」の意味で使われていたので、「場所」(ser) と「方向」(ir) の概念が混同された、と説明していますが、私はそれだけでなく ir 動詞の形が不完全であつたことが大きな原因に挙げられると思います。ir 動詞には語根の部分がありません。そのため、形の補充が必要になり、現在形でも voy, vas, va... のように、まったく違う形が使われています。これは L. vadere 「川を渡る」という動詞から拝借したものです。

さて最後の W の付加による過去形の作り方は、実は canté, cantaste, cantó, ... という規則変化（弱変化）と共通なのです。たとえば、amare (>Sp. amar) は次のように変化しました。amavi, amavisti, amavit, amavimus, amavistis, amaverunt. このような L. are 動詞の語末の a は長かつたので、強勢が常に活用語尾にありました。ここでとくに注意したいのは -v- という子音です。これが先に挙げた(4)の W と同じなのです。habui = habWi, amavi = amaWi と読み替えればよくわかります。違いは habui の場合は子音(b)に直接 W がついていて、amavi には母音 a を介して W が付いていることです。後者はそのために強勢が活用語尾になり、スペイン語では amé, amaste, amó, amamos, amasteis, amaron となりました。vivir の場合も同様です。

次に活用語尾について見ましょう。たとえば、L. facere (>Sp. hacer) の活用は feci, fecisti, fecit, fecimus, fecistis, fecerunt でした。このように YO と ÉL はとても似ていて、ÉL の語尾の t がなくなると区別がつかなくなります。そこで、amó のような規則変化の語尾 o を代用して、区別をつける

ことになりました。その結果、hice, hiciste, hizo, hicimos, hicisteis, hicieron となりました。

このように、スペイン語の点過去の強変化形は少し複雑な事情がありますが、結果だけを見るととても整然としていることがわかります。語根の母音が u と i に統一されていることも単なる偶然ではなく、点過去の印としての統一性が意識されたのだと思われます。ラテン語からスペイン語に継承されていく過程で、古くは vivir, creer, reír, escribir, responder など強変化をしていましたが、次第に整理されて現在残っている強変化はわずかに上にあげた動詞とその派生形だけです。これらは使用頻度が高かったので古い強変化の形式がしっかりと継承されてきたのだと思われます。スペイン語の学習のときも、すべて丸暗記せずに、形式の規則性を見つめ、よく理解してから使うことをお勧めします。

## 線過去と点過去

線過去と点過去というふうに、なぜ2つの意味的に違う過去時制が分かれて作られていったのですか？

動詞の体系全体を見渡してみると、点過去が他の時制とずいぶん違うように見えます。点過去は形だけでなく、使われ方もすでに「過去に終結してしまったこと」として別扱いするために用いられます。このように点過去は他の時制からは独立して意味的にも「切れた」関係になっています。この時制はラテン語にもありました。ラテン語にあった時制の中にはスペイン語の時代になると整理されて消えてしまったものもあります。しかし、点過去は、このように明確に線過去と区別する必要があったために、スペイン語でも保持されました。

## vi と vio にはアクセント記号がない

ver の点過去、vi と vio にはなぜアクセント記号はつけないのですか？

単音節語(1音節だけの語)は原則としてアクセント記号はつけません。つけるときは、別に同じ綴りの語があって、それと区別するためです。

## 3 . 4 直説法未来、過去未来

### 完了形の he, has, ha と未来形語尾の é, ás, á

完了形の he, has, ha と未来形語尾の é, ás, á と似ているのはどういう関係があるのか？

歴史的に関係があります。未来形の語尾は haber の変化に由来します。

## 未来形の成立

なぜ不定詞に haber の活用形がくつつくことで未来形をあらわすようになったのですか？

haber は中世スペイン語では「持っている」という意味でした。そこで、たとえば、comer he ならば「食べることを持っている」「食べることになっている」という意味になり、それが「食べるだろう」という意味に変わりました。

## 未来を示すのに未来形が使われない

¡Hasta la semana que viene! と言いますが、なぜ ¡Hasta la semana que vendrá! とならないのですか？

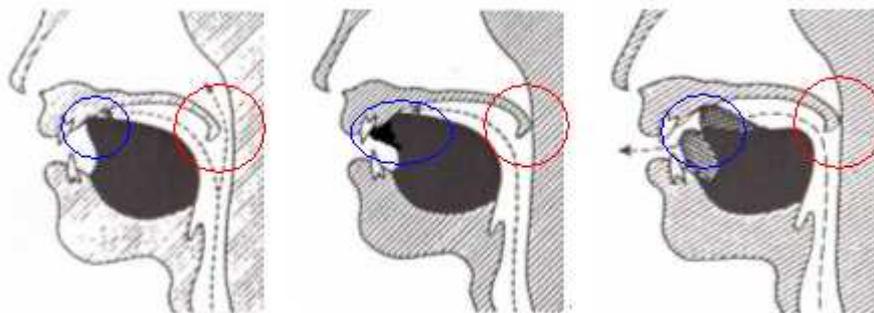
未来形の基本的な意味は「推量」です。ここでは週が来ることは推量しているのではなく、確かな事実ですから現在形になります。Mañana voy al mercado. 私は明日市場に行きます、というときも現在形になります。これも確かな事実として言っているからです。この場合は... iré という未来形で言うと、「意志」や「推量」の意味が強く出ます。

## sabré, pondré, haré

未来形の不規則はどうしてできたのですか？とくに poner や tener の未来形で e, i が d に変わるのは母音が子音に変わっていて変な感じがします。

未来形の不規則形は、haber の形が後続することによって、不定詞の語尾の e または i の強勢(アクセント)がなくなって弱化したために生まれました。これが saber, poder, querer の不規則の由来です。

次に poner, tener, salir, venir で d が現れる理由は発音の仕組みによるものです。次の図を見てください。



(1) [n]

(2) [d]

(3) [r]

たとえば *tener* では *ner* の *e* が先に述べた理由によって脱落すると *nr* という連続が生まれます。(1) [n]の発音をするときは鼻腔に抜ける空気の道(上の図の赤く囲った部分)があります。(3)の[r]になると鼻腔に抜ける空気の道が閉じられ、弾き音を発音します。その移行する部分で瞬間的にまだ弾き音にならないときに、舌尖(上の図の青く囲った部分)が[n]の発音のまま鼻腔に抜ける空気の道が閉じられると、[d]が生まれるのです。また、第三種の *hacer* や *decir* については中世スペイン語ですでに *fazré* や *dizré* という語根の子音 *z* さえもが脱落したためです。

## 未来と過去未来の不規則形

**過去未来の不規則変化は未来の不規則変化と同じ語幹が使われていますが、なぜですか？**

未来形と過去未来形はどちらも不定詞をもとにして形成されました。不定詞に、未来形では *haber* の現在形が、過去未来形では *haber* の過去形(線過去)が、それぞれ付加されたのです。そこでどちらも不定詞という元の形があるので、その変化はどちらも同じで形が共通することになります。

## 過去未来完了

**どうしても過去未来完了で表現しなければならない事態はあるのか疑問である。**

確かに時間の関係で、「過去から見た以後の時点で完了すること」や「過去の時点で完了していることを推量する」というようなことはあまり使われなくてもいいかもしれませんが、条件文の帰結節で使います。(これもそれほど頻度は多くありませんが)

### 3.5 接続法現在、過去

#### 接続法という用語

接続法はなぜ接続法というのですか？

「接続法」はスペイン語の subjuntivo の訳語ですが、これは sub-(下に、従属して) + junct(繋げる)という意味です。従属文の中で用いられることが多いので、このような名前がついています。

#### 接続法現在の活用形

接続法現在はどうして ar 動詞と er 動詞の活用の仕方を逆にしたのだろうか。一体どのようなプロセスでこのようになったのだろうか？

直説法と接続法の間で活用語尾を交換するなんてとても不思議な感じですね。ラテン語の歴史形態論の本(Alfred Ernout, *Morphologie historique du latin*, Paris, Klincksiek, 1974)によると (p.160-161)、ラテン語の古い形オスクウンブリア語で接続法の語尾は a:という長い母音でした。しかし、この語尾を a:re 動詞(スペイン語の ar 動詞)にそのままつけると直説法と混同してしまいます。そこで a:re 動詞には、a:のバリエーションとして存在していた e:という語尾をつけたということです。ですから「活用語尾を交換する」などということではなく、接続法のそれぞれの形には合理的な由来があったことがわかりました。初級スペイン語教育では言語の歴史まで扱いませんから、どうしても表面的に「逆転する」という説明の仕方になります。それでも、先の説明を読むと、なぜ接続法で1人称単数と3人称単数が同じ形になるかがわかります。ar 動詞、er / ir 動詞にそれぞれ統一した接続法を表す母音があったからです。

#### 語根母音変化動詞の接続法現在形

sentir, dormir, pedir においては一人称複数、二人称複数の語根も変化していますが、直説法現在では語根に変化はなく、また pensar, contar においては接続法現在においても一人称複数、二人称複数の語根は変化していない。この違いはいったいどういう理由からくるものなのでしょうか。

少し複雑な問題がからんでいます。実は、pensar と sentir, contar と dormir はそれぞれ異なる語根母音変化をします。直説法現在(p.19)ではたまたま同じように変化しますが、たとえば点過去では異なります。教科書 p.41 を見てください。ここでは、sentir, dormir は pedir の変化と同じになっていま

すね。一方、pensar と contar の点過去は規則変化になります。sentir と dormir はアクセントの規則による二重母音化 ( e > ie, o > ue ) の他に、pedir と同じように働く閉母音化の変化があります( sentir は e > i; dormir は o > u )。閉母音化はアクセントの規則 ( 語根にアクセントのある活用形で母音が変わる ) とは関係しません。それは、「語尾に単母音の i があるときは語根が e ( または dormir では o ) となり、その他の場合は語根が i ( または u ) となる」という複雑な規則です。そうすると、点過去の sintió, sintieron では語尾が単母音の i ではなく二重母音なので語根が i になります。これは pedir も同じです。また、接続法現在でも sintamos, sintáis; durmamos, durmáis では語尾が i でないので、語根が i ( または u ) になっています。これも pedir と同じです。sentir と dormir が pedir と違うのは、二重母音化の規則も同時に働くことです。

語根母音変化全体を整理すると次の 5 種類になります。(1) pensar : 二重母音化、(2) contar : 二重母音化、(3) pedir : 閉母音化、(4) sentir : 二重母音化と閉母音化、(5) dormir : 二重母音化と閉母音化。なお、閉母音化が起こる母音変化動詞は ir 動詞だけです。一方、ar 動詞と er 動詞の母音変化は上の(1)、または(2)になります。なお、閉母音化の規則は複雑なので、初級文法ではむしろ変化表をそのまま全体で覚えてしまうという方法が採られることが多いのです。

## 未来を示す時の副詞句で接続法が使われる理由

**Cuando vayas a una plaza de toros, te gustará.** 「闘牛場に行けば、君は気に入るだろう」。このように未来を表す時は接続法になる理由がわかりません。単純に未来形は使われないのですか？

未来を示す「時」の従属節は仮想的になるので接続法になります。一般に、あることを仮想して、その内容について一定の判断を示すとき、その仮想した部分に接続法を使い、一定の判断をしめすところに直説法を使います。ここで Cuando...の部分が接続法になるのは、この図式に一致するからです。

また、Cuando + 未来形は使われません。これは、未来形は本質的にある事実に対する話者の「推量」という態度を示しています。日本語でも「...するでしょう」とは言わないのと同様です。

## 接続法は過去が 1 つ

直説法の点過去、線過去、過去未来に対応する Creí que llegaba / llego / llegaría él. No creí que llegara él.なのですが、なぜ直説法の肯定形の時

は3通りある過去形（線過去と、点過去では直説法の時に使われ方もニュアンスも違うのに）が接続法になると、一通りになってしまうのですか？

直説法には3種類の過去があるのに、接続法では1種類の過去しかないためです。それでは、なぜ接続法が1種類だけなのかは次の事情によります。直説法の未来と過去未来は話者の推量を示すのですが、接続法は主観的な評価の内容になるので、それとぶつかります。そのためだと思いますが、古いスペイン語の形には「接続法未来」があったのに、今では使われなくなりました。また点過去は、特殊な過去形で動詞の体系全体から見ると外れています。「終わったこと」として別扱いされるのです。そこで接続法過去は体系的には直説法線過去に対応するのです。実際には直説法過去未来と点過去も含めることになります。

### 接続法過去の ra 形と se 形

接続法過去に ra 形と se 形の2種類がある理由がわかりません。どういう由来なのか教えてください。

se 形はラテン語の接続法過去完了に由来します。一方、ra 形は直説法過去完了からできた形です。スペイン語の早期から直説法過去完了は haber の過去 + 過去分詞で表現されたので、ra 形が直説法過去完了としては徐々に使われなくなり、その代わりに15世紀頃に接続法過去として使われるようになりました。ということで、現代スペイン語で ra 形と se 形が競合する結果になりました。なお、ra 形は現在でも少し古い文体で（とくにラテンアメリカで）直説法過去完了の意味で使われているのを見ることがあります。

### 条件文

なぜ非現実の条件文では、現在のことを想像しているのに（接続法の）過去形が使われるのですか？

一般に過去形が条件文で使われると「...だったら」という意味で（現在形よりも）現実性がなくなります。日本語の非現実仮定文でもたとえば、「私が金持ちだったら（仕事などしないのに...）」などと言います。このことは願望文でも同じです。cf.日本語「...だったよいのにあ」

## 3.6 命令形

### 命令形の形

#### なぜ命令形は短いのですか？

ラテン語の命令形は2人称に限られていたので、とくに人称を区別するための語尾は必要ありませんでした。命令は過去や未来などを示すための語尾も必要でなく、ほとんど呼びかけに近い働きがあり、動詞の語尾をつけないでそのまま語幹だけで表現しました<sup>13</sup>。ただ単数と複数の区別は必要だったので、複数形に *te* という語尾がつけられていました。これが現代スペイン語の *d(cantad, comed, vivid)* の由来です。*te* が2人称複数の原形で、*Lat. ama:tis, audi:tis* (> *Sp. amáis, oís*) の *tis* はこの *te + s* にさかのぼります<sup>14</sup>。*s* は2人称を示す印だったとすれば、やはり、命令形は間投詞のように短い形をとったことがわかります。

### 2人称

#### なぜ命令形は2人称だけ形が異なるのですか？

スペイン語の2人称の肯定命令形は歴史的には、ラテン語の命令形そのまま継承しています。ラテン語の命令形は2人称しかありませんでした。命令形は基本的に話し相手に向かって使われるものだからです。ところが、スペイン語の時代になって一般の名詞から *usted, ustedes* という代名詞が生まれて、これが3人称だったために3人称の命令形が必要になったのですが、新たに作る、ということではなく接続法が代用されました。接続法は「...が...でありますように(望む)」という従属文で使われていたから、この「望む」の部分がなければそのまま命令形に代用できたのです。

### 命令形の不規則形

よく使われている(命令形の) *poner, tener, venir, hacer, ir* などが短いのは、やはり長い間にそうなったのですか？2人称だけ複雑になっているのは、命令形では2人称が一番多く使われるために例外ができてしまったためですか？

ラテン語の2人称単数の命令形に由来する中世スペイン語の命令形の語

<sup>13</sup> cf. Hofmann (1963: 338-9), Meillet et Vendryes (1968: 142). スペイン語の ¡Mira!, ¡Venga!などの使い方もそれに似ています。

<sup>14</sup> cf. 高津(1954: 273), Monteil (2003: 381).

末は ar 動詞ならば a、er/ir 動詞ならば e でした。このうち語末の e は、一般に脱落する傾向があったため、ten<sup>15</sup>, ven, sal などの形となりました。これは一般的な音声現象なので中世では他の動詞にも短縮形が生まれましたが、その中で頻度の高い動詞だけが現代スペイン語にも残ったようです。単音節になったのは、こうした物理的な原因だけでなく、命令や指示を簡潔に示そうとする意図が働いたことも考えられるでしょう<sup>16</sup>。

tiene – ten, viene – ven を見ると、3 人称単数形では二重母音化しているのに、命令形ではしていません。ven はラテン語の ve:ni: に由来するので、長母音 e: がそのまま保たれたのです。ten は tene: に由来するので（短母音は二重母音化します）、tiene になりますが、tien という形がありましたが、これは ven の影響（類推）を受けて、ten となりました<sup>17</sup>。

## 命令文の代名詞の位置

**なぜ肯定命令文だと代名詞が動詞の後ろにきて、否定命令文だとそれが動詞の前にくるのですか。なにか理由があるのですか。**

肯定命令文と否定命令文の一番大きな違いは後者に否定語があることです。これが代名詞の位置の条件になりました。「代名詞」の項で説明しましたように、中世スペイン語では「動詞 + 代名詞」または「強勢語 + 代名詞 + 動詞」、現代スペイン語では「代名詞 + 動詞」という語順になりました。中世スペイン語では、代名詞が弱勢となったので強勢語の後につく傾向がありましたが、否定命令文では no がその強勢語の役目を果たして代名詞を引きつけます。肯定命令文では動詞の命令形が代名詞を引きつけたので、代名詞は動詞の後にきます。

## 否定命令文で命令形が使われない

**なぜ否定命令文で命令形が使われないのですか。肯定命令文で使われるのならば、否定文でも使ってよいような気がします。**

ラテン語で「ne: + 命令形」という形も使われていました。他にも、ne: + 接続法現在、cave + 接続法完了、ne + 接続法完了、no:li: + 不定詞という形もありました<sup>18</sup>。ne: + 接続法現在は日常語に使われていたということなので、これが後でスペイン語の no + 接続法になったのだと思います。肯定文

<sup>15</sup> cf. Lloyd (1993: 501-2).

<sup>16</sup> cf. Alvar y Pottier (1983: 209).

<sup>17</sup> cf. Lloyd (1993: 501).

<sup>18</sup> cf. Collart (1968: 139), Calero (2003: 117)..

では命令形が使われ続けたのは、頻度が高かったためでしょう。頻度が低い否定文では、「...しないように（望む）」という意味でも使われた *ne*: + 接続法現在が否定命令文でも使われるようになったのは、ちょうど日本語でも「...しないように」という形で禁止を示す否定命令文となるのと同じだと思います。

### 3.7 不定詞、現在分詞、過去分詞

#### 英語の *to* の代わりになるもの

スペイン語の不定詞で、英語の *to* の代わりになるものがないのはどうしてですか？

不定詞は本来、動詞の名詞形で、英語の *to* にあたるものはなくそのままの形で使われました。英語の *to* は「方向」（...へ）を示す前置詞なので、不定詞も「方向」に通じる「目的」（...するために）の意味のときに使われたのが最初です。それがだんだんと一般化して不定詞の印のようになりました。ということで、スペイン語は最初から不定詞の形だけを使い続けたので、この問題はなぜスペイン語に *to* のような印がないのか、というよりも、なぜ英語に *to* のような印が生まれたのか、ということをお考えの方がよいと思います。

### 3.8 複合形

#### 完了形

#### スペイン語と英語の現在完了形

完了形の *haber* + PP が英語の *have* + PP と似ているのはなぜですか？

英語の *have* + PP ができた由来はスペイン語の *haber* + PP と形式的にも時代的にも平行しています。I have written the book は、古英語の I have the book written 「私は本を書いた状態で持っている」という形に由来します。スペイン語も中世スペイン語では *haber* に「持つ」という意味がありました。しかし、英語の *have* とスペイン語の *haber* は形がよく似ているものの、同じ起源に遡るかどうかはよくわかりません。

## pretérito perfecto

「現在完了」は英語では present perfect なのに、スペイン語ではなぜ、pretérito perfecto 「完了過去」というように、というのでしょうか。

動詞の時制の名称には文法史上多くの変遷がありました。それが、ほぼ定着したのはスペイン王立アカデミー (Real Academia Española) の文法書の力が大きかったと言えるでしょう。ここでは pretérito perfecto compuesto 「複合完了過去」という用語が使われています。これは、次のような歴史的な経緯があったためだと思われます。ラテン語には he dicho のような形はなく、「完了」という単一の動詞形態で過去時制 (スペイン語の点過去) も現在完了も表していました (たとえば DIXI 「私は言った」= dije / he dicho)。それが後に、haber + 過去分詞で「完了」の意味を特化して区別するようになったのです。ということで、「現在完了」はラテン語の過去を示す形に (一部) 対応するので、伝統的に pretérito perfecto compuesto 「複合完了過去」と呼ぶようになったのだと思われます。一方、点過去のほうは pretérito perfecto simple 「単純完了過去」と呼ばれています。

英語と比べると、スペイン語の「現在完了」は次のように、英語の現在完了の他に過去にも対応します (Ramsey and Spaulding)。Mi hermano ha llegado hoy. = My brother has arrived today. / He aprendido el español en España. = I learned Spanish in Spain. しかし、形についても機能についても英語の現在完了とよく似ているので、同じ用語 (present perfect 「現在完了」) を使って両言語を比較することが多いのです。日本でも「現在完了」という用語を使うのがふつうです。やはり、その方がわかりやすいためだと思います。また、現在完了で使われる haber の活用形が「現在」の変化形を使うので、完了「過去」というよりも「現在」完了と呼ぶことが好まれたという理由も考えられます。

## 未来完了の意味

¿Dónde habré dejado mis gafas? で「私はどこに私の眼鏡を置いたのだろうか?」と言う訳になるのですか? なぜここで現在完了形ではなくて未来完了形を使うのですか?

未来完了は未来に完了することを推量する場合と現在に完了していることを推量する場合があります。この場合は後者です。この文を現在完了にして ¿Dónde he dejado mis gafas? としてもよいのですが、そうすると推量の意味がなくなります。

## 進行形

## 直後形

## 受動形

### ser 受動態の過去分詞

ser 受動態の過去分詞はなぜ性数変化をおこすのでしょうか？

英語の be 受動態で使われる過去分詞とは違って、スペイン語の ser 受動態の過去分詞は主語の性数と一致します。これは、たとえば *La ciudad fue destruida*. 「その都市は破壊された」という文が、*Mi casa es pequeña*. 「私の家は小さい」という文と同じように、「主語 + ser + 主語の補語」という構造になるためです。この補語は形容詞でも過去分詞でもかまいません。<主語の>補語なので主語と性数が一致するのです。このように、ser 動詞は主語と補語を結びつける役目を果たしますが、それがいない場合は「名詞 + 形容詞・過去分詞」の構造になり、ここでも次のように形容詞と過去分詞は名詞に性数が一致します。*la ciudad destruida*「破壊された都市」、*la casa pequeña*「小さな家」。「主語 + ser + 主語の補語」の構造と「名詞 + 形容詞・過去分詞」の構造で偶然同じ現象（性数の一致）が起こったのではなく、2つに共通する文法の仕組み、つまり構造（語句の繋がり）の明示化があると考えられます。そこで複雑な文を読むとき、性数の一致を手がかりにすると構造がわかりやすくなります。

## その他

## 4 形容詞

なぜ名詞と形容詞の語尾の変化形が似ているのですか？

\*\*\*

なぜ形容詞が名詞の前にくるときと後にくるときで意味が異なるのですか？

\*\*\*

スペイン語には物理的な意味での *profundo* 「深い」の対義語にあたる「浅い」という意味の単語はないのでしょうか？手持ちの辞書を引いても「浅い」は「*poco profundo*」と表現されています。英語には「*shallow*」という単語がありますが、フランス語・イタリア語でも直接「浅い」という意味を表す単語はないという話を聞いたことがあります。これはラテン系の言語に共通の特徴なのでしょうか？ラテン語の場合はどうなのでしょう？そして、なぜ「浅い」という意味の単語が生まれなかったのか。これが一番の疑問です。

私もこのことは気になっていたので調べてみました。ラテン語の「浅い」(*shallow*)は *vado:sus* といいますが、これは *va:do:, va:dere* 「行く」からの派生で「歩いて渡れる、渡河できる」というのが原義です。これは基本的な意味ではないので、やはり「浅い」という基本的な意味にはなりません。

「深い」*profundus* もよく見ると、*pro-fundus* と分析できるので、これも派生的な意味に由来します。ラテン人の祖先はあまり「深い、浅い」という概念を意識せず、どうしても必要なときに、「底、台」*fundus* や「渡る」*va:dere* から派生させたようです。

ロマンス諸語では、*it. profundo, fr. profond, sp, port. profundo* のように一律に *lat. profundus* を保っています。一方、「浅い」の意味は「あまり深くない」(*poco profundo*)で表現します。はたして「浅い」は日常生活であまり使われないのでしょうか。試しにスペイン語の旧約・新約聖書で *profundo* を全文検索してみると 50 回使われていますが、すべて肯定的な「深い」という意味で、*poco* がつく例はありませんでした。*Salmos. 69.2 Estoy hundido en cieno profundo, 69.14 de lo profundo de las aguas, Mateo. 18.6 en lo profundo del mar*, などです。これらはラテン語訳(*Vulgata*)では *profundus* に対応します。

このように、言語によっては、一見重要だと思えるような対立が基本的な表現になくて、言葉を派生させたり、言葉を足したり、(否定)文にして補ったりすることがあります。英語では「兄、弟」に対応する基本的な

語がありませんね。日本語でも「けわしい山」や「美しい姿」の反対語となるような(基本的な)形容詞が見つかりません。意味的な反対語は、(形容詞の男女形のように)文法的な操作で作られるのではなく、必要に応じて語彙的に形成されるので(word-formation)、必ずしも常に一対一の基本的な対応があるわけではありません。「けわしい(道)」の反対語(と思われる)「なだらかな」も形容詞ではなく、「なだらか」+「な」で構成される形容動詞です。「醜い(姿)」も「見+にくし」に由来します。語彙が豊富でない子供に反対語を聞くと、「...でない」(たとえば、「きれいでない」)と答えます。

スペイン語の「深い」(profundo)のほうが基本的によく使われるのは、やはりこちらのほうが「浅い」よりもポジティブだからだと思います。「浅い」はラテン語では「歩いて渡れる」ような浅さを示すときにだけポジティブにとらえられたのでしょう。海や川を眺めて、その浅さを意識するよりも深さを意識するほうが多いと思います(「海の深さ」、「背の高さ」と言いますが、「海の浅さ」や「背の低さ」とは特別の表現以外ではあまり言いません)。浅さを意識するとすれば、歩いて渡れるような小川や砂浜です。そのときは、「小川」や「浜」という名詞が使われて、とくに形容詞は不要になるでしょう。

言語も文化と同じように、(自分の、または一定の言語・文化を中心に絶対的な基準を置くのではなく)相対的に考察するべきだと思います。そうすることで、自分の言語・文化も相対化されて思わぬ発見もはずです。また、語の構成を見ることで、その形成をもたらした(自然や文化の)環境や先人の意識を想像するのは楽しいと思いますが、いかがでしょうか。

## 5 副詞

### juntos

Los tres juntos tomamos café. の juntos は副詞の junto なのにどうして s がつくんですか？

この juntos は[形]junto の複数形です。ここでは los tres を修飾して「一緒に」という副詞的な意味になります。

### ¡Estupendamente!

¿Cómo has pasado este fin de semana?という文に、なぜ¡Estupendamente! という形で答えているのですか？ ~mente という形は英語で ~ly に相当するのなら、なぜ¡Estupenda!にならないのですか？（英語で考えると Wonderful!ではなく、Wonderfully!となり、おかしい気がするのですが...）

その前の疑問文では夏休みを過ごした様子を疑問副詞で聞いています。そこで、Estupendamente という副詞で答えています。

### スペイン語の-mente は英語の-ly

スペイン語の-mente は英語の-ly と働きが似ていますが、2つはどのような関係がありますか？

英語の-ly の語源は lic で「体」という意味でした。スペイン語の mente は「心」という意味です。それぞれ「...という体で」、「...という心で」という意味から副詞になりました。スペイン語の mente は現代でも「精神」という意味で使われます。

### 形容詞が女性形になる理由

mente がつく副詞で、形容詞が女性形になる理由は？

mente は「心、精神」という意味の女性名詞です。その前にくる形容詞が女性形になるためです。

## 6 機能語

### 6 . 1 冠詞と代名詞

#### el agua

なぜ agua の定冠詞は el になるのですか？

これは la が古いスペイン語ででは ela という形であったためです。そこで ela の a が次の a と融合して、ela + agua は el agua、一方 ela casa ならば la casa となりました。このように、言語の変化は意識されずに単に音声的な理由で変化するものが多くあります。

#### de と del

「地下鉄の入り口」では entrada del metro で、de metro としない理由は何ですか。

de と del は微妙ですが、de metro とすると1つの形容詞のような感じになります。たとえば Escuela de Medicina ならば「医学部」、「医学校」という語でまとまっていて、「医学の学校」というように分析的でないときに定冠詞がつきません。de Medicina が全体で1つの修飾語のようになっています。一方、たとえば Escuela del Vino というのがありますが、これは「ワインの学校」であって、まだ「ワイン学校」のように熟した語になっていません。そのような学校がたくさんできてくれば別でしょうが...（実際はすでにあると思いますが、それでも熟していないので、しばらくは del が使われると思います。）

entrada de metro という、日本語にすると、まるで「地下鉄入り口」という感じです。「地下鉄の入り口」というように分析的に見るならば、やはり del のほうがよいと思います。もちろん、話者・書き手が「地下鉄入り口」という実体を熟したものとして認識していれば、entrada de metro も可能でしょう。（必ずしも日本語で「の」があるか否か、が判断基準になる、というわけではありません。日本語とスペイン語に同じような認識のプロセス—incorporation—が働いている、と思われるので、あえて平行させてみました。）

## un par de veces al año

un par de veces al año という表現がありますが、どうして「al」 año となるのですか？「一年に」なら、英語では few times a year などと言うので、uno año という言い方はありませんか？

al, a la は「...につき」という意味で使われます。また、「...につき」は、por un año「一年で」という言い方もできます。un par de veces al año は英語にすると a couple of times a year となりますが、スペイン語の al año と英語の a year は違う言い方になります。スペイン語と英語の冠詞の使い方はよく似ていますが、このように微妙に異なることがあります。

## 冠詞 + 固有名詞

las Fallas はどうして固有名詞なのに la がつくのですか？ Fallas は固有名詞でも s がつくのですか？

Falla はラテン語の facula「たいまつ」に由来する普通名詞で、現代スペイン語では「(バレンシアのサンホセ祭りで焼かれる)張り子の人形」を指します。それが Valencia 独特のお祭りの名前として大文字で書かれます。このように大文字で書かれていても普通名詞に由来するものは定冠詞がつきます。複数形になる理由も普通名詞に由来するからです。

## 無冠詞 en casa de

en casa de Tomoko の casa にはなぜ定冠詞 la がつかないのですか？

定冠詞の有無は微妙な問題で、この casa は定冠詞をつけてもよいケースです。定冠詞をつけると特定の建築物として「友子の家」を取り立てて話題にしている感じです。一方、定冠詞がないと en casa de が「...の家で」という意味の前置詞句のような役割を果たし、とくに「家」という名詞が特定の建築物を指すように意識されていません。このように一般に冠詞がつかない名詞は、さらに大きな句（この場合は前置詞句）の中に取り込まれて使われることが多いのです。

## 無冠詞 : salir de casa

cuando salía de casa の casa に定冠詞がつかないのはなぜですか？

一般に定冠詞は、聞き手や読み手によって認識されているものにつけま

す。この場合の casa は Juan の家のことを指しますが、これまで話題にな

っていたり、状況から聞き手（友子）にわかる内容にはなっていません。むしろ、単に salir de casa「外出する」という動詞句の一部として使われていて、具体的な建築物を意識して指しているわけではないからです。

## 無冠詞 + 名詞の複数

**Una mujer vendía claveles.**の claveles はどうして冠詞が不要のですか？

単数ならば un clavel となり、不定冠詞をつけますが、複数なので冠詞がありません。不定冠詞の複数形はありません。

## tú と usted

**tú と usted はどのように使い分けたらよいのでしょうか？**

tú と vosotros は、家族や友人など普通の話し方をする相手に使います。usted と ustedes は、目上の人や初対面の人など丁寧な話し方をする相手に使います。初対面でも若い人の間などでは、tú と vosotros が使われます。

お互いに usted 通して話すことも tú で話すこともありますが、一方が usted で他方が tú で話す場合もあります。これは年配の人が若い人に親しみを込めて tú で話し、一方若い人が敬意を示して usted で話すときです。この場合も、若い人が親しみをこめて話すならば tú を使います。公式な場では usted に変わります。たとえば、普段 tú で私に話していた教授が論文審査で usted に変えたときは緊張しました。

## ラテンアメリカ

ラテンアメリカでは vosotros が使われず、そのかわりに ustedes になります。tú はラテンアメリカでも使われます。

## usted は三人称

**なぜ usted は三人称の形を取るのでしょうか？**

usted は古いスペイン語で vuestra merced「あなたの恵み」(vuestro は古くは「あなたの」という意味でした)という名詞句に由来します。名詞句なので 3 人称なのです。

## le, les が se となる

なぜ、間接目的語の le, les が 3 人称の直接目的語の人称代名詞と共に使われるとき、se となるのですか？

これは文法的な理由からではなく、中世スペイン語で le(s) + lo(s) > ge lo [ジェロ] > [シェロ] > se lo という音変化があったためです。その結果、後で習う再帰代名詞の se と同じ形になりました。

## conmigo, contigo

conmigo や contigo という形はどうして出来たのですか？ go とは何なのですか？ go がなぜついたのですか？

たしかに、go がなければ con él, con usted などと同じような形になってわかりやすいのですが、実はこの go は con と同じ語源なのです。ラテン語で cum という形の前置詞でした。con...go という形で強調されたようです。古いスペイン語（中世）には nosotros, vosotros でも conosco, convosco という形がありましたが、これは使われなくなりました。それに対して conmigo と contigo はよく使われるので、現代スペイン語まで残ったのだと思います。

## 活用形 + 主語代名詞

¡Qué miedo! -- Mas miedo pasé yo. 「まあ、こわい！ 僕のほうがこわかったよ」はどうして Más miedo yo pasé. ではないのですか？

スペイン語の主語の位置は動詞の前とは限りません。この文(Más miedo pasé yo)では、pasé の目的語が前に置かれていて強調されています。主語の yo が動詞の変化でわかるはずなのにわざわざ書かれているのは、新しい情報を強調して示しています。新しい情報は文の後ろに置きます。

## 人称代名詞の位置

スペイン語では一般に「人称代名詞 + 動詞」の語順になるのに、どうして comiéndolo とか comerlo のように、動詞が現在分詞や不定詞だと「動詞 + 代名詞」の語順になるのですか。

ラテン語の人称代名詞には他の品詞と同じように高低アクセントがあり、その位置は自由で、動詞の位置によってしぼられることはありませんでした。それが中世スペイン語になると、直接目的語と間接目的語の人称代名

詞は強勢を失って強勢語の支えが必要になり、その支えの語の後につながるようになりました。そこで、(1)「動詞(支え) + 人称代名詞」と、(2)「強勢語(支え) + 人称代名詞 + 動詞」という2つのパターンが生まれました。「不定詞、現在分詞、肯定命令形 + 代名詞」という語順は(1)のパターンに由来します。つまり現在分詞や肯定命令形が強勢語なのでそれにくっついたのです。このように動詞の後に代名詞がくるときは、動詞の前に他の強勢語がない場合です(強勢語があっても、その後にコンマなどで示されるポーズがあることが多いです)。

一方、動詞の活用形ならば主語の名詞などがあって、それにくっつく形で代名詞が動詞の前につきました<sup>19</sup>。それが(2)のパターンです。現代語ではこの(2)のパターンが一般化して、とくに動詞の前に強勢語がなくても代名詞が前置したままの形が普及したのです。これが第三のパターン(3)「人称代名詞 + 動詞」です。

さて、不定詞と現在分詞の場合は *Quiero verlo. / Lo quiero ver.* や *Estoy viéndolo. / Lo estoy viendo.* のように二通りの位置が可能です。これらはそれぞれ(1)のパターンと(3)のパターンを示しています。

## 代名詞の重複

**なぜ *Tu hijo ha vuelto a pegarle a un compañero de clase.* 「あなたの息子はまたクラスメートをぶった」となって、*pegarle* の *le* と *a un compañero de clase* で繰り返すのですか？**

これはスペイン語独特の「代名詞の重複構文」と呼ばれるものです。とくに間接目的語で代名詞が繰り返されることが多いのですが、この場合のように直接目的語にも起こることがあります。たしかに *le* は絶対に必要だということではなく、たとえば *He tenido que llevar al niño al médico.* 「私は子供を医者に連れていかなければならなかった」では、*llevarle al niño* とはなっていません。どのようなときに重複が起こるか、動作が目的語に深く関わる(関与する)場合です。(しかし、この意味は微妙です。逆に代名詞をつけないと関わりがなくなり、冷たく引き離れた感じになります) また、目的語が動詞の前に出た場合は必ずと言っていいほど代名詞が重複して出てきます。たとえば *A la abuela la veía siempre alegre.* 「おばあさんはいつも楽しそうだった」

<sup>19</sup> たとえば、*Él lo vio.* 「彼はそれを見た」。動詞が活用形であっても強勢語がなければ、*Violo.* 「彼はそれを見た」のように(1)のパターンになりました。

## 再帰代名詞の「義務」の意味

No se dice “O.K”, se dice “de acuerdo”.の意味がなぜ「OK と言うのではなくて、de acuerdo っていうんだよ」となるのですか？

これは再帰代名詞の不定用法です。不定の人が主語になるので、この場合のように「人は一般に～である」という意味から「～することになっている」というような「義務」のような意味になることがあります。

## 6 . 2 疑問詞と関係詞

### スペイン語の¿Por qué?と英語の For what?

スペイン語の¿Por qué?は英語の For what?に対応するのに意味が違うはなぜですか？

英語の for にはスペイン語の por と para が対応します。¿Por qué?の por は「理由」を示すので、英語のように「何のために」というのではなく、「何の理由で」という質問になります。英語の For what は、スペイン語では¿Para qué?となります。なお、para は歴史的には por + a という2つの前置詞が合体したものです。

### 疑問詞と関係詞

疑問詞と関係詞の形が似ている理由は？

\*\*\*

\*\*\*

### cómo と que

Verás cómo llegas a tiempo al aeropuerto.でなぜ cómo が使われるのかがわかりません。Verás que llegas a tiempo al aeropuerto. なら分かる気がするのですが…。

Verás que llegas a tiempo al aeropuerto.でも正しいスペイン語です。ここでは、「どのような様子であなたの空港到着が間に合うかわかるでしょう」という意味になります。英語でも次のように see how という連続で使われますから、それと比較してください。You will see how microbes affect soil properties.

## 6 . 3 所有語と指示語

### 所有語の形

所有語で女性形や複数形があるものとないものがあるのはどうしてですか？

複数形はすべてにあります。教科書 p.45 の「...nuestro, vuestro は女性形(a)と複数形(s)がある」前置形、後置形に共通です。女性形がないのは mi, tu, su ですが、これは男女に共通して使われる形です。一般に形容詞は o で終わった男性形がないと、その女性形(a)がありません。(冠詞や指示形容詞などは例外です)

### mi = my, tu = your

mi は英語の my と似ているけれど、tu は英語の your と似ていないのはなぜですか？

英語の my, mine, me とスペイン語の mi, mío, me と同じ起源(インドヨーロッパ語)に遡ります。スペイン語の tú, te, ti, tu, tuyo は古い英語の thou (「汝」)と同じ起源に遡ります。この thou は、13 世紀に本来複数の意味だけであつた ye (後で you になった)が単数にも使われるようになったため、消えてしまいました。なお、スペイン語の yo 「私」と英語の I はどちらもインドヨーロッパ語に推定される原形 eg に遡ります。ラテン語の ego も同じです。

### 所有語の変化

たとえば、José me prestó sus apuntes. 「ホセは彼のノートを私に貸してくれた」という文の主語は José で目的語が sus となっているのですが、主語に合わせれば su apuntes となると思います。sus となる理由を教えてください。

su は所有形容詞なので、形容詞のように変化します。ここでは conciertos という複数の名詞に一致して sus という複数形になります。ここの sus は「彼らの」という意味ではなく、「彼の」という意味です。su = 英語の his, her、sus = 英語の their という関係ではなく、su, sus という変化は形容詞として単に名詞に一致しているだけだということを確認してください。

## 指示詞の *este, ese, aquel* という男性単数形

指示詞の形について。*este, ese, aquel* という男性単数の形は何だか変です。男性複数が、それぞれ *estos, esos, aquellos* となっているのだから、単数も *esto, eso, aquello* であったほうが自然だと思います。女性形も *esta, esa, aquella, estas, esas, aquellas* なのですから。男性単数形がこのようになった理由は何ですか？

指示詞のパラダイムは、一般の名詞や形容詞と違って男性・単数形だけが特別な形をしています。この問いにはインドヨーロッパ語(IE) ラテン語(L) スペイン語(Sp)という言葉史を辿らなければなりません。Sp. *este*「この」の語源はL. *iste*「その」です。これには IE の指示詞の印である\*t(e)がついています。L.*iste* は母音のない *ist* という形も併用されていましたが、学校で習う古典ラテン語は *iste*(男性), *ista*(女性)、*istud*(中性)「その」です。このときになぜ他の名詞のように、*isto, ista...* とならなかったのかは、おそらく母音のない形が主格形で使われていたからだと思います。後で *ist* に母音がついたのです。この *e* について、ラテン語歴史文法の本(A. Ernout, 1974, p.93)は、「その起源がはっきりしない、たぶん *iste, ille* は変化語尾のない形で *e* とゼロが交替したのだろう」と述べています。さて、スペイン語の時代になると、L. (h)ic「この」はとても短い語だったので他の語と紛らわしくて嫌われ、次第に L.*iste* > Sp. *este* が「この」の意味で使われるようになりました。この時も、やはり男性は *este* であって、*esto* ではありません。Menéndez Pidal は単に、L.主格形が Sp.でも使われた、と述べていますが、Alvar y Pottier は、やはり対格 *esto* が使われていたが、この語尾が脱落し、その後に母音 *e* が添加して *est' > este* となったと説明しています(「指示詞の主格形 + 名詞の対格形」という連続が考えられないからです。なお、スペイン語の名詞は原則としてラテン語の対格形に由来します)。Alvar y Pottier は、ここで復元した母音 *e* は中性形(*esto*)と区別するためだった、と述べていますが、私は母音 *e* が中立的な音であったことも原因として挙げられると思います。なお、このような現象は冠詞でも起こりました(男性単数だけが *el* という形になっています)。

## 6 . 4 前置詞

### a と al

¿Conoces a Juan? と Conozco al Sr. López. では、どちらも人物なのにどうして *a* と *al* との使い分けがなされているのでしょうか？

Sr.は *señor* の略語で *señor* と読みます。これは普通名詞なので、その人に

言及するときは定冠詞をつけることになります。文法的な関係は Sr. (señor) と López が同格になります。一方、Juan は固有名詞なので定冠詞はつけません。また、al は a (前置詞)+ el(冠詞)が合成されてできたものなので、女性ならば a + la となります。cf. Conozco a la Sra.. (señora) López.

## al と a la

男性は a + el = al となるのに、なぜ女性の場合は a + la で ala とならずにそのまま a la なのですか？

de と a は次に男性単数の定冠詞が続くときは、それぞれ del と al という合成した形になります。女性の定冠詞(la)や複数の定冠詞では合成しません。al や del は a + (e)l, de + (e)l で隣接する母音が融合していますが、a + la や de + la では母音が繋がっていないので融合がなかったために、このような違いが生まれました。

## a+「人」を示す直接目的語

なぜ、a+「人」を示す直接目的語で、a に意味がないのにつけなければならないのですか？

スペイン語では主語が動詞の前にあるとは限らないので、a をつけないと名詞の位置だけではそれが主語なのか目的語なのか不明になります。たとえば José conoce a María というとき、a があるので María が目的語、a が無い José が主語であることがわかります。一方、それが「物」ならば、たとえば José conoce Madrid. という文で考えると、Madrid が意味的に主語にはなれないので、a は不要になります。ラテン語から発達したスペイン語はかなり早い時期からこの直接目的語の a をつけるようになりました。ラテン語では名詞の語尾が変化して主語であるか目的語であるかが明示されていました。スペイン語になってそれが消失したので、この前置詞 a が機能的にそれを補ったのです。

## por と para

por と para は使い方が微妙で、形もよく似ています。これには何か理由があるのですか？

それは para が por と a (方向を示す) という2つの前置詞が合成してできたためです。辞書などでは、por は行為の出発点となる(内在的な)「動機・理由」を示し、para は「目的、目標、利益」など行為の外にある「到達点」

を示すと説明され、次のような例文が挙げられています。Voy a España por hablar con el Sr.Lopez.「私はロペス氏に話ができればと思ってスペインへ行きます」(動機)。Voy a Espana para aprender el idioma.「私はことばを学ぶためにスペインへ行くつもりだ」(目的)。por「理由」+ a「方向」= para「目的」という図式で考えるとわかりやすいでしょう。

## 6 . 5 接続詞

### y

**Madrid es una ciudad ruidosa y con mucho tráfico.**という文で、どうして **y** が入るのでしょうか？ **y** なしで **Madrid es una ciudad ruidosa con mucho tráfico.**でも良い気がしてしまうのですが...

確かに、**y** をつけなくても正しい文になります。このときは、**ruidosa** と **con mucho tráfico** が一体になって **una ciudad** を修飾します。大体「騒がしく交通量が多い都市です」という意味になります。一方、間に **y** を挟むと **ruidosa** と **con mucho tráfico** がそれぞれ独立して同じ資格で **una ciudad** を修飾します。このときは「騒がしく、そして交通量も多い都市です」という意味になります。ほとんど同じ意味ですが、少し意味の伝え方が違います。

### y と e

**なぜ y と e の形が区別して使われるのですか？**

両者に意味の違いはありません。e は次に i, hi(母音であって、ie や io などの二重母音は除く、yo など除く)で始まる語があるときに使われる形です。スペイン語の y はラテン語の et (et cetera の et)に由来し、中世では語尾の t が脱落して e という形になりました。近代になって i (y)と e が併用されるようになったのですが、i の方は e + a > i + a というような次の母音が前の母音を閉じさせる傾向によって説明されています。ただし、問題の「e + i」は変化せず、そのまま残って現代スペイン語でも e が保持されました。この理由は、i + i という連続を避けたためだと考えられます。このような現象を「異化作用」disimilaciónと言います。

## 6 . 6 数詞

### dieciséis にアクセント記号

どうして **dieciséis** にアクセント記号が付き、**diecisiete**, **dieciocho** はアクセ

ント記号が付かないのですか？

sで終わる数詞 10 台、20 台の数詞は、アクセント記号をつけないで規則に従うと、後ろから 2 番目の音節にアクセントが来ることになり、正しい発音になりません。たとえば *dieciseis* は *ci* が強く読まれることになります (*seis* は二重母音)。これを防ぐために *seis* にアクセント記号をつけます。一方、*diecisiete* はアクセント記号をつけなくても、そのまま *sie* に強勢が置かれます。

## 11-15 までが特殊な形

どうして、11-15 までが特殊な形をしていて、16 以降が規則的になっているのですか。英語では 11 と 12 だけが異なるので気になります。

ラテン語では 11 から 17 まですべて「1 の位の数字 + 10 (*decim*)」という形でした(18 と 19 はそれぞれは「20-2」、「20-1」という言い方をしました)。 *decim* は 10 (Lat. *decem* > Sp. *diez*)と同じです。たとえば、11 ならば「1 + 10」(*un + decim* > *undecim*)という言い方になります。スペイン語の時代になると、11, 12, 13, 14, 15 は *undecim* > *once*, *duodecim* > *doce*, ...のように *ce* で終わる語となって、古いラテン語の形をそれなりに保ちました。現代スペイン語の 11-15 の...*ce* という語尾は *diez* の *z* と起源を共通にしているわけです。一方、16 と 17 はそれぞれ「10 + 6」(*diez y seis* > *dieciséis*)、「10 + 7」(*diez y siete* > *diecisiete*)という一般の形に合流しました(たとえば 36 は *treinta y seis*)。前者(11-15)のように特殊な形が残るのは頻度の高い語の場合です。小さな数字のほうが大きな数字より多く使われていたようです。

## *cinco, quince, cincuenta, quinientos*

*cinco, quince, cincuenta, quinientos* と頭文字が変わるのはなぜですか？

歴史を遡るとこれらは皆同じ語源にたどり着きます。それは「5」という意味で *quin*(*q*)となり、語頭の音は[kw]「クウ」でした。このようにどれも同じ語源の音に由来するのですが、*cinco* と *cincuenta* は[k-k]という子音の連続が嫌われて[-k]と変化しました。一方、*quince* と *quinientos* は[k-k]という子音の連続がないので、[k]の音が保たれました。

## 1 語の数詞と y を使った数詞

30 までは 1 語なのに、どうして 30 より大きい数字は y をはさんで 3 語にするのですか？

歴史を通じて 16 より大きな数は書き方が 2 つありました。資料を調べてみると次のような結果になりました。(C は「世紀」、数字は語形が見つかった回数)このように 19 世紀までは「... y ...」という形のほうが優勢だったようです。treinta 以降は語尾が a なので a-i>i という変化にならなかったようです。これに対して veinte の場合は e+i>i なので変化しやすかったのでしょうか。diez の場合はそのままつけばよいのですから、さらに容易な変化だったわけです。

*	15C	16C	17C	18C	19C	20C
diez y seis	16	242	205	135	263	21
dieciséis	1	70	49	106	93	382
veinte y uno	2	27	57	15	9	3
veintiuno	0	26	7	12	24	96

## dos miles とならない

「千」の mil はどうして 2 千、3 千...となっても mil のまま語尾が変化しないのですか？

ラテン語の mille には複数形がありました。たとえば 2000 は duo milia のようになります。中世スペイン語ではこの milia という形を使わずに、dos veces mil 「1000 を 2 回」というようになりました。この形から dos mil となったようです。

## primer, tercer

どうして primero と tercero だけが男性単数名詞の前で変化するのですか？

uno, alguno, ninguno, bueno, malo など男性単数名詞の前で o が脱落します。これらは脱落しても語尾が n で終わるので安定しています。他にも多くの n で終わる単語があります。同様に primer, tercer も r で終わるので安定します。r で終わる語もたくさんあります。ところが segundo, cuarto, quinto...は、o が脱落すると、それぞれ nd, rt, nt など終わることになって、スペイン語では語末に現れない子音の連続になってしまいます。それで母音をしっかりつけて安定させていたのです。noveno は noven でもよさそうですが、6 番以降はラテン語から直接入った言葉なのでほとんど変化しませんでした。それでは女性名詞の前では、なぜ a が脱落しなかったのでしょうか？これは母音 a は口を大きくして発音するためで、そのエネルギーが強かったからです。なお、スペイン語の語末にある子音は d, s, n, r, l, z

です。その他の子音はとても稀です。

## 序数詞の語尾

序数詞の語尾が ro, do, to, no, vo, mo といろいろあるのですが、何か規則はあるのですか？

序数詞はスペイン語の中には規則が見えにくいのですが、ラテン語、さらに遡ってインドヨーロッパ語では語尾は to, mo, o でした。primero と tercero にはスペイン語の形成過程で-ero という語尾がつけました。

## 6 . 7 不定語と否定語

### ¿Está alguien?

estar は存在することはすでに わかっていて、それがどこにあるのか、という「所在」を示す。存在することが相手にとってもわかっているものを示すため、定冠詞をとることが多い、と説明されましたが、¿Está alguien? --- No, no está nadie.という例文をみつけました。この文章、どのように理解したらよしいのでしょうか。

たしかに、estar で「存在」を示す文が、あまりフォーマルでない文体で使われることがあります。主語が定冠詞をつけたときに estar が使われることがあります。たとえば、相談しながら、いろいろと問題点を出し合ったあとで、Luego, está el problema de tiempo..などと言います。この文では、すでに el problema del tiempo について、その存在が意識されているときでしょう。そこで、定冠詞が使われているのだと思います。固有名詞でも可能です。例：¿Está el profesor Moreno?

ご質問の会話文は具体的にどのような文脈の中なのかわからないのですが、¿Está alguien?と聞くのは、すでに alguien の存在そのものについては疑問の余地がないのですが、「（そこに）誰がいるの？」という感じです。たとえば、物音がしたときなど。ふつう、単純に「誰がいる？」というときは ¿Hay alguien?と聞きます。（物音がしたときは、¿Está alguien?.を使い、そうでなければ¿Hay alguien?と使う、という問題ではないのですが、たとえば、そういう状況を考えてみると、わかりやすいのではないかと、思います。No está nadie.という文は、まさに（そのような状況で）¿Está alguien?と質問されたときにしか、ふつうは言えないでしょう。誰もいない部屋に入ったとき、いきなり No está nadie.というのは変です。この場合はやはり No hay nadie.というほうがずっと自然です。Google で No hay nadie と No está

nadie を検索すると、圧倒的に前者が使われていることがわかります。

## 否定語の前置と no

nunca は動詞の後につくときは前に no が要るのに、前につくと no をつけないでよいのはどうしてですか？

実は古くは（中世で）「nunca no + 動詞」という連続も使われていました。これが次第に no が使われなくなったのにはいくつか理由が考えられます。(1)否定語は否定される語の直前に置くのが原則、(2) nunca と no が同じ文法的な資格（「否定」の副詞）を持つので同一視された、(3)本来否定語でなかった apenas, jamás, tampoco などは no をつけないで用いられていたの、それによる類推。動詞の後にあるときには、動詞を否定する要素が直前にないので no が必要になります。このことは nunca に限らず、tampoco, nadie, nada など他の否定語にも共通です。

## 肯定文 + tampoco

**Si llueve mañana, tampoco pasa nada. 「明日雨になっても問題ありません」**  
という文で、前の文章が否定文ではないのに **tampoco** が使われるのはなぜですか？

tampoco はたとえば、No vino Juan y tampoco José. (フアンは来なかったし、ホセもだ)のように否定文の後でさらに否定して付け加えますが、この文のように必ずしも no を使った否定文でなくとも jugar mal という「否定的な内容」のときもあります。El Barcelona habrá jugado mal, pero el Real Madrid tampoco ha jugado bien. さらに質問の文 Si llueve mañana, tampoco pasa nada. のように、y, además, no...の意味で使われることもあります。

## 7 文と節

### HACE 「...前に」

どうして「する」という意味の *hacer* の 3 人称で「...前に」という表現になるのですか？

時が経過したことを示すのに中世(12世紀～)では *haber* を使っていました。たとえば、*ha mucho tiempo* で「ずいぶん昔に」という意味になります。これならば *haber* の「存在する」という意味から理解しやすいと思います。ところが近代(16世紀以降)になって、*hacer* の非人称的用法(主語がない文)として、*hace mucho tiempo* という形が使われるようになりました。語順も *mucho tiempo* を目的語として *hace* の後に置きます。この変化には、*hace buen tiempo* というような「天候」の表現や *haber* と *hacer* の語形の類似が関係していると思います。

### 「存在」の *hay*

どうして「存在」の *hay* は単数も複数も同形なのですか？

*hay* は無人称なので、その後の名詞は目的語になります。そのため *Hay un libro*. *Hay libros* のように動詞の *hay* は活用変化しません。動詞の活用変化は主語に一致するからです。*Hay* の後の名詞が主語ではなく目的語であることは、それを代名詞にすると主語代名詞ではなく直接目的語の代名詞になることによってわかります。たとえば、*¿Hay cerveza? -- Sí, la hay*. 現在形では *hay* という特別な形になりますが、過去形や未来形でも同じようにならず単数形が使われます。*Había libros interesantes*. *Ayer hubo una boda en esta iglesia*. *Mañana habrá una boda*.

### 複数主語 *son* + 単数名詞

*Los jardines de la ciudad son una maravilla*. どうして主語が複数なのに補語は単数になるのですか？形容詞は数を一致させるのに何だか不思議な感じがします。

主語は *los jardines* です。動詞は主語と一致します。ここでは主語が複数、補語が単数です。主語をまとめてそれが *una maravilla* である、という意味になります。(主語がない文では *ser* 動詞が補語と一致することもあります。たとえば *Son las dos* 「2時です」)

主語と補語の性と数の一致は形容詞の問題です。たとえば、*Estas alumnas son japonesas*. 「この女生徒たちは日本人です」。補語が名詞のときは、たとえば、*Éstos son mis libros*. 「これらは私の本です」のように、その同じ性と数の名詞が使われる場合ももちろんありますが、本文(12)のように、補語がまったく別の名詞であることもあります。補語が名詞のときは、その補語が指している物の性と数が問題なのであって、主語の性と数との一致によるものではありません。形容詞の性と数の変化は（単なる一致によるので）意味を変えませんが、名詞の変化は（男性なら男性という意味、複数ならば複数という意味があるので）意味を変えます。性と数の一致ということは英語にはないので、はじめは少し困難に思われるかも知れませんが、だんだん慣れていくと思います。

### 自動詞が少ない 再帰動詞

先日再帰動詞の用法を学習しましたが、スペイン語にはなぜ自動詞が少ないのか気になりました。わざわざ他動詞を特殊な用法によって自動詞化することには、なにか文化的な要因があったのでしょうか。

言語についてのすばらしい観察です。私も自動詞が少ないな、と思っていたのですが、42,000語の辞書をパソコンで検索して調べてみました。結果はあなたのおっしゃる通りでした。自動詞が他動詞に比べて半分にも満たないのです（自動詞が約 1,700語、他動詞が約 4,600語）。この少ない自動詞の意味の分野をカバーするのが再帰動詞です。

この理由を「文化的な要因」に求めるのははととも興味があります。文化は歴史的な遺産を引き継いでいるので、少し言語の歴史を辿ってみましょう。スペイン語の母親であったラテン語では、現代スペイン語の再帰動詞にあたるものとして、いろいろな形態がありました。その中でもとくに受身形が重要だと思います。現代スペイン語の再帰動詞にも受動態の用法があります。なぜ主語と同じものを指す代名詞（再帰代名詞）が受動態を作るのでしょうか。これが再帰動詞のポイントです。それは、たとえば「私が起こされる」（受動態）でも、「私が起きる」（自動詞化）でも、どちらも「起きる」人は「私」だからです。そして、「彼が私を起こす」と言っても他動詞が使われたときも、その結果「起きる」人も、やはり「私」であることに変わりはありません。それらに共通した意味を再帰代名詞が担っているわけです。

たしかに、おっしゃる通り、自動詞化の用法をほかの活用のように語尾活用で表現することも可能だったのです。まさにラテン語では現代スペイ

ン語の再帰用法にあたる自動詞の意味を活用語尾で表現していました。たとえば *laetor, queror* と言うと、*me alegro* 「私は喜ぶ」や *me quejo* 「私は不平を言う」の意味になりました。しかし、ラテン語の動詞活用はかなり複雑なので、それがスペイン語の歴史の中で順次整理されて、現代スペイン語の形に落ち着きました。なお、参考までにラテン語やゲルマン語の祖語として想定される印欧語では主語が「行為を引き起こす」という型になるのに対し、日本語などでは主語が「ある状態に自然になる」という表現をする傾向があった（現在もある）、という見解が歴史言語学や言語類型論で論じられています。

## 再帰代名詞と所有形容詞

**自分の体や持ち物に行為が及ぶとき、所有形容詞を使わず再帰動詞を使うのはなぜですか？**

たとえば、「洗顔する」というとき英語のように *Lavo mi cara* (=英語：I wash my face.) のような言い方よりも、スペイン語では *Me lavo la cara.* という方が普通です。これは、「洗顔する」(*lavar la cara*) という行為が私に (*me*) およぶ、という発想です。もし、*Lavo mi cara* と言うと、*mi cara* という物体に向かって直接 *lavar* という行為が及んでいる感じです。たとえば、¿*Por qué si lavo mi cara varias veces al día, aún tengo acné?* 「一日に何度も顔を洗っているのに、なぜニキビが出るんだろう」という文を見るとその感じがわかると思います。ここでは単に「洗顔する」というよりも、具体的に *mi cara* をしっかりと意識してそれをごしごし洗っている感じがします。なお、このような言い方は再帰動詞に限らず、相手の体や持ち物に行為が及ぶときにも一般に所有形容詞よりも間接目的語を使います。たとえば、¿*Te lavo la cara?* 「顔を洗ってあげましょうか？」スペイン語では間接目的語の代名詞、英語では代名詞の所有格、そして日本語ではどちらも示さないのが普通です。比べてみるとおもしろいと思います。

## 3 人称の再帰代名詞

**3 人称の再帰代名詞は、なぜ *lo* や *la* などではなく *se* が使われるのですか？ それから、3 人称の再帰代名詞は、なぜ単数と複数が同じなのですか？**

1 人称と 2 人称の再帰代名詞 (*me, te, nos, os*) は一般の目的語と同じ形ですが (*Me levanto, Te levantas, ...*)、3 人称だけが特別です (*Lo levanta* でなく、*Se levanta*)。この理由は、1 人称 (*me*) と 2 人称 (*te*) が再帰動詞で使われたとき、それが「自分」の意味になるのに対して、3 人称 (*lo*) だと「自分」

という意味ではなく、他の3人称の誰かを指すことになるからです。たとえば、Lo levanta と言えば、A という「彼」が B という「彼」を起こす、という意味になります。そこで、再帰代名詞の se を使えば、「彼は(自分で)起きる」という意味を示すことができます。

この便利な se という代名詞の歴史的な由来については次の2つの説があります。第一の説によると、印欧語で、もともとすべての人称で再帰を示すために swe という形が使われていた、ということです。これは日本語の「自分」と同じですね(「私は自分で起きます」、「彼は自分で起きます」)。今でもロシア語ではそのようになっています。その後、1人称と2人称では、たとえば「私が起きる」ということを示すとき、「自分」というよりも「私」という意味が意識されて me が使われるようになったというシナリオです。Ernout - Meillet [1932:662], Adrados [1975:785ff]

また、第二の説によれば、swe は3人称の他動詞の文と再帰動詞の文を区別するために後からできた形だということです。それがさらに後になって古スラブ語(そして現代ロシア語)で、すべての人称に使われるようになった、と考えられます。Adrados-Bernabé-Mendoza [1998:69]

いずれにしても、se は「再帰」を示すマークにすぎなかったので、とくに人称変化(me, te, lo, ...)をする必要はありませんでした。このことから se に複数形がない理由もわかると思います。つまり、se は「再帰」を示すマークだったので、わざわざ複数形にしなくてもそれだけで再帰という意味が間違いなく伝わるからです。

## 主語の後置

なぜふつうの平叙文で動詞の後に主語がくることがあるのですか？

\*\*\*

## 8 語と語形成

### 英語と形が似ている

visitar, や habitante など英語と似ていますが、cuando や siempre は似ていないのはなぜですか？

英語にはノルマン人の征服以来多くのフランス語起源の言葉が使われるようになりました。フランス語とスペイン語はラテン語が共通の祖先なので、とても似ています。そこで when や always など英語本来の語はスペイン語に似ていませんが、フランス語、そしてさらに遡ってラテン語やギリシャ語に由来する語はスペイン語と共通になります。しかし、少し意味が変わることもありますから注意しましょう。

### スペイン語の cantidad と英語の quantity

スペイン語の cantidad と英語の quantity の形がかなり違いますが...

ラテン語の qua はスペイン語では ca に変化し、ラテン語の tate(m) はスペイン語の dad に変化しました。英語の語尾 ty はスペイン語の dad に対応します。

### 曜日

lunes など月から金までの曜日には語末に s がつきますが、sábado と domingo にはつかないのは何故でしょうか。

私もこれは変だなと思ったことがあります。スペイン語の場合について見ると、lunes, martes, miércoles, jueves, viernes... のように s で終わっているのに、sábado, domingo で es がない。

英語では、ぜんぶ...day となっていて規則的になっています。それらは「...の日」という意味でした。Sunday「太陽の日」、Monday「月の日」、...といった具合です。

スペイン語でも、たとえば、martes はラテン語の DIES MARTIS「軍神マルスの日」、jueves は DIES JOVIS「ジュピターの日」というように神々の名前をつけていました。「所有」を示す語尾(属格と言います)の..IS がスペイン語で es になったのです。それから、lunes はラテン語の DIES LUNAE にあたるので、もともと属格の形が...IS ではありませんでした。それでも、スペイン語はそれを他の日と同調させて lunes という形にして

しまいました。このような作用を言語学では「類推」(analogy)と言います。

それでは、なぜ、sábado と domingo も類推作用によって...es をつけなかったのでしょうか。domingo はラテン語の DIES DOMINICUS 「主の日」に由来しますが、これはもともと名詞の属格ではなく、形容詞 (DOMINICUS, 「主の」という意味) であったためだと思います。sábado はヘブライ語の SABBATH に由来し、これだけで「休息の日」という意味の名詞でした。このように、「土曜日」と「日曜日」に...es がないのは、ラテン語で名詞の属格でなかったことが原因だと思います。そして、この2日は1週間の中でもとても大切な日だったので他の日に同調させるようなことはなく、独自の形を保ったのだと思います。

ちょっと長くなりましたが、言語の歴史を考察するときは、機能的・形式的な作用と文化的な背景の、どちらも見る必要があると思います。

### 「浅い」という意味の単語

スペイン語には物理的な意味での「profundo 深い」の対義語にあたる「浅い」という意味の単語はないのでしょうか？手持ちの辞書を引いても「浅い」は「poco profundo」と表現されています。英語には「shallow」という単語がありますが、フランス語・イタリア語でも直接「浅い」という意味を表す単語はないという話を聞いたことがあります。これはラテン系の言語に共通の特徴なのでしょうか？ラテン語の場合はどうなのでしょう？そして、なぜ「浅い」という意味の単語が生まれなかったのか。これが一番の疑問です。

私もこのことは気になっていたので調べてみました。ラテン語の「浅い」(shallow)は vado:sus といいいますが、これは va:do:, va:dere 「行く」からの派生で「歩いて渡れる、渡河できる」というのが原義です。これは基本的な意味ではないので、やはり「浅い」という基本的な意味にはなりません。

「深い」profundus もよく見ると、pro-fundus と分析できるので、これも派生的な意味に由来します。ラテン人の祖先はあまり「深い、浅い」という概念を意識せず、どうしても必要なときに、「底、台」fundus や「渡る」va:dere から派生させたようです。

ロマンス諸語では、it. profondo, fr. profond, sp, port. profundo のように一律に lat. profundus を保っています。一方、「浅い」の意味は「あまり深くない」(poco profundo)で表現します。はたして「浅い」は日常生活であまり使われないのでしょうか。試しにスペイン語の旧約・新約聖書で profundo

を全文検索してみると 50 回使われていますが、すべて肯定的な「深い」という意味で、poco がつく例はありませんでした。Salmos. 69.2 Estoy hundido en cieno profundo, 69.14 de lo profundo de las aguas, Mateo. 18.6 en lo profundo del mar, などです。これらはラテン語訳(Vulgata)では profundus に対応します。

このように、言語によっては、一見重要だと思えるような対立が基本的な表現になくて、言葉を派生させたり、言葉を足したり、(否定)文にして補ったりすることがあります。英語では「兄、弟」に対応する基本的な語がありませんね。日本語でも「けわしい山」や「美しい姿」の反対語となるような(基本的な)形容詞が見つかりません。意味的な反対語は、(形容詞の男女形のように)文法的な操作で作られるのではなく、必要に応じて語彙的に形成されるので(word-formation)、必ずしも常に一对一の基本的な対応があるわけではありません。「けわしい(道)」の反対語(と思われる)「なだらかな」も形容詞ではなく、「なだらか」+「な」で構成される形容動詞です。「醜い(姿)」も「見+にくし」に由来します。語彙が豊富でない子供に反対語を聞くと、「...でない」(たとえば、「きれいでない」)と答えます。

スペイン語の「深い」(profundo)のほうが基本的によく使われるのは、やはりこちらのほうが「浅い」よりもポジティブだからだと思います。「浅い」はラテン語では「歩いて渡れる」ような浅さを示すときにだけポジティブにとらえられたのでしょう。海や川を眺めて、その浅さを意識するよりも深さを意識するほうが多いと思います(「海の深さ」、「背の高さ」と言いますが、「海の浅さ」や「背の低さ」とは特別の表現以外ではあまり言いません)。浅さを意識するとすれば、歩いて渡れるような小川や砂浜です。そのときは、「小川」や「浜」という名詞が使われて、とくに形容詞は不要になるでしょう。

言語も文化と同じように、(自分の、または一定の言語・文化を中心に絶対的な基準を置くのではなく)相対的に考察するべきだと思います。そうすることで、自分の言語・文化も相対化されて思わぬ発見もはずです。また、語の構成を見ることで、その形成をもたらした(自然や文化の)環境や先人の意識を想像するのは楽しいと思いますが、いかがでしょうか。

## スペイン語の estudiar と英語の study

英語では s で始まる語が、なぜスペイン語では es になるのですか？

s + 閉鎖音(p, t, k)という連続はスペイン語では es + 閉鎖音(p, t, k)となり

ます。たとえば、espía (spy)、estudiar (study), esquí (ski)。これは、s のほうが閉鎖音よりも聞きとりやすいので、s だけで音節を作る傾向があったためです。音節を作るために本来なかった母音 e を語頭に付け加えました。日本語では子音だけの発音ができないので子音の後に u を付け加えますが（たとえば「スパイ」supai）、この現象とよく似ています。

## スペイン語と英語

スペイン語と英語が似ていることがありますがこの理由は？また、どちらが先に生まれたのですか？

言語が生まれた時期を明確に定めるのは難しいのですが、最初のスペイン語の形が文献に残っているのは 10 世紀ごろです。それから 15 世紀までが中世スペイン語、そして 16 世紀以後は近代スペイン語となります。英語は、およそ次のような時代区分になります。

古英語	Old English (OE); Anglo-Saxon	650 年頃	1100 年年頃
中英語	Middle English (ME)	1100 年頃	1500 年頃
近代英語	Modern English (ModE)	1500 年頃	1900 年頃
現代英語	Present-day English	1900 年頃	現在

英語はゲルマン系の言語で、スペイン語はラテン系の言語ですが、英語にはノルマン人の征服があったため多くのフランス語が入りました。それらの語はスペイン語の形とよく似ています。

## クリスマス

「クリスマス」は英語でも日本語でも「キリスト」に似たような綴りや発音だったりするのに、スペイン語ではどうして Navidad なんでしょう。「キリスト教徒」はスペイン語でも英語と同じように cristianos でしたよね。

英語の Christmas は古英語の Cristes moesse に由来し、これは Chist's mass「キリストのミサ」という意味でした。一方、スペイン語の Navidad は古くは Natividad といい、「生誕」という意味でした。nacer「生まれる」と同じ語源です。

## racista

racista の冠詞が los になっているので、辞書で調べたところ男女同形だった。なぜで男女同形の形が女性形なのですか。

この形は確かに a で終わっていますが女性形ではありません。a が必ずしも女性形

である、ということではなく、多くの a で終わる語が女性名詞であると考えるとよいでしょう。ここでは ista という語尾に注意しましょう。スペイン語の接尾辞の ista と英語の ist はラテン語の ista に遡り、さらにこれはギリシャ語の istes に遡ります。これらは ista という形を変化させず語形の上から男性と女性の区別をしませんでした。このように a で終わる後で男女同形のものが他にもあります。たとえば、patriota「愛国者」、colega「同僚」など。

## 否定の接頭辞

スペイン語の否定の接頭辞には a- (anormal), des- (desconfianza), in- (imposible)がありますが、どうして3つもあるのですか？これらの使い方の違いはありますか？

a- (anormal), an- (analfabeto)はギリシャ語の「否定」を示す接頭辞でした。母音の前では n をつけて an-となります。an のほうが完全形で、この n は印欧語の「否定」を示していたと想定されます。ということで「否定」の接頭辞 a-, an-はギリシャ語源の単語の前につくこととなります。anaerobio, apolítico, ateo, avitaminosis など。これに対応するのがラテン語源の「否定」を示す in-です。これは次に来る子音の影響で i- (ilegal, irresponsable)となったり、im-(imposible, imborrable)となったりします(英語のように m の前で -m とはなりませんから注意しましょう：inmediatamente / cf. 英 immediately)。このように in の n が否定を示す要素です。スペイン語でも no, nunca, ninguno などがあります。それから英語の un- (unaware)も n がありますが、それもギリシャ語の an-、ラテン語の in-と共通の印欧語の起源を持ちます。des- (desconfianza)はラテン語起源の「否定」の接頭辞で他にも、de- (deforme), dis- (discapacitar)や di- (disentir)という形にもなります。これは「二つ」を意味する bi- (bienio), bis- (bisabuelo)と同語源です。「二つ」「両方向」「逆・反対」というような意味変化をたどったようです。ということで an-と in-は「否定」、des-は「反対」というのが語源的な解釈です。でも、「否定」と「反対」の意味の差は微妙ですから、どちらも「否定」の接頭辞としてとらえ、文脈に沿って意味や用法を確認していくとよいでしょう。

## No hay de qué

No hay de qué.は、どうして「どういたしまして」の意味になるのでしょうか。

言語資料によると、No hay de quéという表現は19世紀から使われ始め

たようです。文脈は Gracias. -- No hay de qué darlas.でした。つまり、この darlas は dar las gracias という不定詞句の las gracias が代名詞化したものです。それが省略されて、No hay de qué となったようです。qué の後に直接不定詞が続くときは、「...すべき」「...できる」という意味になります。この場合は、「感謝すべきものはない」「感謝には及ばない」「どういたしまして」となります。